

くらしと教育をつなぐ

We

4

1999

女と男の家庭科新時代

特集 居場所考II

べてるの家のこころみ

川村敏明さん

〈問題縁〉でつながる

—岡村聡子さんと鶴田桃江さんのお話から
稲邑恭子

一人ひとりが選びとる居場所

中村英之



今を生きる子どもたちへの信頼と

教育・社会への新しい視点を

不登校新聞は、不登校にかかわる
さまざまな人を結び、読者とともにつくる
非営利市民活動としてのメディアです。
あなたもぜひ、ご参加ください。

〜〜編集顧問〜〜

安積遊歩	/カウンセラー
内田良子	/「子ども相談室・モモの部屋」主宰
大田 堯	/東京大学・日本子どもを守る会名誉会長
岡村達雄	/関西大学・教育行政学専攻
小沢牧子	/大学講師
落合恵子	/作家
熊沢 誠	/甲南大学・労使関係論
芹沢俊介	/社会問題評論家
津田玄児	/弁護士
浜田寿美男	/花園大学・発達心理学専攻
本多勝一	/ジャーナリスト
山下英三郎	/スクールソーシャルワーカー
若林 実	/小児科勤務医



東京編集局理事
奥地圭子
名古屋支局理事
多田 元
大阪支局理事
山田 潤

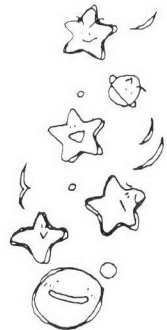
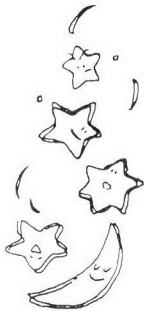
◆◆◆ご購入のお申込みは…◆◆◆

最寄りの郵便局から購読料をお振り込み下さい。1日と15日の月2回お届けします。

- ・口座番号 00100-6-22077
- ・加入者名 全国不登校新聞社
- ・購読料 6ヵ月間4800円
(送料込) 12ヵ月間9600円

個人名封筒でのお届けや、バックナンバーご希望の方は、通信欄にその旨明記して下さい。

- ・お問い合わせ
TEL 03-5360-1231
FAX 03-5360-1232
E-MAIL futoko@green.an.egg.or.jp



特集 居場所考Ⅱ

インタビュー 川村敏明さん
べてるの家のこころみ 聞き手・山崎薫樹 3

シンポジウム記録
〈問題縁〉でつながる 稲邑 恭子 13
— 岡村聡子さんと鶴田桃江さんのお話から
【投稿】自助グループの暗黒面について 岡村 聡子

ぼくは家族が怖い2
一人ひとりが選ぴとる居場所 中村 英之 23

■女と男の家庭科新時代

オホーツクの潮風荒く
+ 困ったときの一発ネタ【番外編】 江口凡太郎 26

家庭科 — 風が変わる、匂いが変わる
多様な家族をめぐる 石橋満里子 28

家庭科 click here
第2回 消費者教育について 山内聡子・加藤みな子 34

■連載

食の歳時記
第1回 野草の生命力と春の香りを食卓に 入江 一恵 35

女が歳をとるとということ 第31回 木村 栄 36

本をめぐる超! 気まぐれなりれ-えっせい
第11回 『はちみつバイブレーション』 菅井 純子 37

新・シネマの魔
第1回 雪と孔雀 — 「フェリーニのアマルコルド」について 武田 秀夫 38

乱読大魔王日記 第1回 冠野 文 42

宮台真司の世紀末講座
第7回 意味から強度へ 宮台真司 まとめ・編集部 44

性をめぐる超! わがままなりれ-えっせい
第1回 セックスワークと三つの自立 中条きよし 50

ジェンダーフリー大曼陀羅図鑑 第1回 薦森 樹 53

自己表現トレーニング 第11回 批判されても生きられる 河村 ふみ 54

終幕 第4回 空き地はどこに 水田 宗子 58

●読者のひろば 61

●連載者紹介 64

●編集後記 65

表紙・イラスト 川口民子

特集 居場所考Ⅱ

〈居場所〉で思い出すのは――

かいだんをはんぶんおおりたところに／ぼくがいつもすわるだんが／ある／かいだんのどのだんにも／このだんと／そっくりなだんは／ない／ぼくはいちばん下のだんにはすわらない／いちばん上のだんにもすわらない／だからこのだんが／ぼくのいつも／やすむ／だん

かいだんをはんぶんのぼったところに／二かいでもない 一かいでもないとこがある／そんなところはこどもべやにもないし／まちのなかにもない／そこにいるといろんなかんがえが／ぼくのあたまをかけめぐる／「ここはぜつたいに どこでもない ここはどこにもないところ／ある！」(クリストファー・ロビンのうた／A・A・ミルン／小田島雄志・小田島君子訳／昶文社)

自主学童保育の指導員をやっていた頃の情景。ヤドカリ風隠れ家から宴会用のアジトまで大小さまざまな段ボールの家、シーツのテントが乱立する中、その時の気分に乗った自分の居場所をみつめて潜り込んだりそこから出撃していた子どもたちのこと。

自分のおかしさを柵に上げてお互いに変だ、おかしいとけなしあつたりほめあつたりする、そんな場所が私は好きです。空気がいつも流れていてとどまらず、毒も矛盾もある空間が……。

あなたはどんな居場所が好きですか？

(稲邑)

べてるの家のこころみ

川村敏明さん

北海道・浦河赤十字病院医師

聞き手・山崎薫樹
まとも・編集部

——人間は生きていけば失敗するものです。べてるの家の人たちに大きな失敗がなくなっているのは、自分の体験を聞いてくれる人、あるいは失敗しそうなとき相談にのってくれる人がいるからです。

知らないことが「不安」を生む

——私たちは病気を持っている人に恐怖感を持ちがちですが、川村先生は医師の立場からどのように思っていますか？

川村 世間にそういう思いがあるのをよく知ってますが、そのことをいうなら、僕自身、初対面の人、知らない人には、誰に対してもそれなりの不安を感じるわけです。ですから、そういう不安の延長線上のことかなと思ってます。

僕らも精神病の人に初めて会うときには不安ですが、コミュニケーションを持って少しづつ分かり合えれば、いわゆる恐怖感や不安は大きな問題ではなくなります。

精神科医になった最初のころは今よりはるかに恐怖感があつたし、こちらの未熟さのために関係が悪くなって、そのために時に恐怖感を感じることがなかったとは言えませんが、それは相手の病気のせいじゃなくて、病気の人達とつながる方法を知らなすぎたということが一番大きな理由なんじゃないかと思います。自分の知らない人で、怖いと思う人は、病気以外の人でも沢山いると思ってますから。

——病気の人に危害を加えられるのではないかと不安に思っている人が多いと思うのですが？

川村 そうですね、全国的に見れば非常に数が少ないとはいいいながら、そのような問題が実際にあることは事実です。ただ、精神病の世界のことをその部分だけを強調

して語られるということは非常に偏った見方かなと思ひます。

私たちは精神病の人たちとお付き合いするときに、まず怖い人たちとか、怖い病気だからとかいうことでは考えなくなつてきています。世間からみると怖い病気といわれてはいますけども、むしろ非常に不安を感じていて、脅えている人だと考えた方が正確なんじゃないかなと思つて、何の応援も支えもない人達が、どんな行動なり、言動なりをとつてしまふかということは、容易に想像がつくんじゃないかなと思ひます。

ですからその人が病気とどう付き合つていて、どんな応援がある状況かを知ることが非常に大事なんじゃないかなと。

応援の仕方

——先生はどういうふうに応援していききたいと思ひますか？

川村 まず、一九八三年に「べてる」に入居した早坂くんは長い付き合いですから、病氣を持って、いろんな失

敗をして、再発も何回もするなかでよくやつてるなど、真剣に自分が生きることに暮らすことに取り組んでると、たとえば彼がパフォーマンスをしているときであれば、僕はそういうふうに感じています。

僕は彼から勇氣づけられることもあつたし、僕も彼になんらかの勇氣づけをする場面があつたんだろうと思つてますけど、そういう関係の中で病氣のことも語つていたいと思ひます。そういう相互に勇氣づけし合う関係がないまま僕が病氣の話をして、きつと彼には応援という形では伝わっていかないだろうなど。応援という形で伝わらなければ彼も僕を応援しようという気持ちにはやつぱりなれないんだろうと思ひます。

——病院の役割、病氣を治すということを、先生も大事に考へてらっしゃるわけですね。

川村 僕は一方的に病氣を抑えなければならぬ患者さんはほとんどいないと考へています。僕が今考へているのは、本人が病氣を担つて生きていくことを、医療というかたちでいかに応援できるかということなんです。

生きていること、暮らしということがそこにあるし、やはり生き方が問われてくる。ただ病氣さえ治まつてしまえばという発想では、幸せだとか安心だとかということ

とに考えが及ばない。でも病気でない人がみな安心して生きてるかというと、決してそんなことはないですね。

病気がよくなるというのは、悩みが深くなること、多くの悩みを抱えて問題にぶつかることですし、挫折することですし、そういう挫折や問題の解決を病気を抱えながらやっていかなければならない。だから「病気をえよくなればいいんだよ」というような単純な考え方はできない。

幸い、健常者で挫折してくれる人が世間で随分多くなっていていますが、精神病の人達も健常者の人達も何も変わらないと僕は思います。生き方が問われているんだと思えば、今のベテルの人達は、確実に失敗しながら自分の生きる上での力を貯えていつているな、その力強さから見ると、世間に対してメッセージを飛ばしていけるだけの力をつけてきているなと、僕はそんなふうに見えます。

薬は病気の症状を軽くして生きることを応援するという意味で使っていくみたいなと思うんですけど、使い方を間違えると人間全体を押しえつけて管理してしまうことになりがちです。そうなってしまうと、やはり精神病の人達の置かれている状況は非常に悲惨になっていくので

はないかと思えますね。

——管理するんじゃないということですね、お医者さんは。

川村 ももちろん我々は管理者にならざるを得ない部分があると思います。病気の時期に、あらゆる精神病の人達に対して管理的な部分をゼロにするのは、僕は今の時点で難しいと思います。しかし、応援しているんだということはいつも感じられるように、それを中心にしていかないと、治療する側にとっても治療を受ける側にとっても、また町民の人達にとっても何もいいことが起きないなど。僕は、病院の中から生れてきたこういう関係を地域の中にも広げていけたらなと思っています。これは精神病の人達だけに必要な特殊なことだと思っていないですから。

出会いを求めて

——早坂さんはどういうふうに変ってきたかと思っていますか？

川村 彼が退院したのは一九八三年の四月九日。彼はその前、精神病院の中で数年間を暮らしてたんでしょけ

ど、病院にどうしてもいなければならぬというわけではなかった。社会の中に受け皿がない、いわゆる社会的入院の患者さんっているんです。

当時ここは「べてる」という名前もついてなかったし、どうせだめだったら戻ってくればいいさという、実に気楽ないいかげんな退院だったかもしれません。でも、隣が教会ですから、教会に通っていて差別なく受け入れてくれる世界に触れ合っただろうと思います。彼は知的障害もあるので、差別されるということにもものすごく敏感だった。それが受け入れてもらえる世界と出会ったんです。当時の病院は今よりもっと管理的でしたから、管理の世界から管理なく受け入れてくれる世界に行つたときに、彼がものすごくのびのびはじめたのを僕は感じていました。

その半年くらい後に、彼が二〇〇人くらいの前で自分の病気の体験や教会に通いはじめたときの思いを語る場面を見たんですが、精神病院にいたらこんなふうにはなかっただろうなど。だから医療という枠の中だけで精神病の患者さんたちをとらえてはいけない、やはり広い世界に触れ合うこと、宗教と触れ合うことも彼にとつて大切なことだったんだろうなど感じました。病院の中

だけに置いていけるとそんな出会いもなかっただろうと思いますし、そのへんはルーズだったことがすごく良かったと思つてます。

出会いの量が圧倒的に増えて、そのなかから得た経験が、彼の財産、また「べてる」の財産になっていると思います。精神病院の中にいると出会いの量が少ない。心の栄養が入ってこない。出会いは質より量ですから、素晴らしい人に会ったり素晴らしい経験をするとということだけじゃなくて、いろんな失敗と出会うとか、嫌な人と出会うとか、辛い思いでもなんでもいい、とにかく人を通じていろいろなことと出会っているということが大事なんじゃないかなと思います。狭い枠のなかだと、所詮、狭い枠の中だけの出来事、あるいは成果しかないですから。

精神病院は意味はゼロだとは思いませんが、やはり「通過点」にしていかなければならないなと思います。

——精神病を持っている人に、出会いが大切だというのはどうですか。

川村 私は精神科の患者さんに言いますが、「部屋の中で、孤独で、時間を費やして急に良くなった人いませんよ」と。それは例え話で言えば、転ばないようにする



川村敏明さん

には寝ていればいいけど、可能性を求めて立ち上がって歩いて行って人と出会うということが、身体の面でも精神面でも、生きていくという意味をつかむことなんじゃないかと思います。出会いが少ないまま、何かそこに幸せを感じるとか、そこで安心しろとか言うのでは、まるで非常に栄養の少ない土で育ててあとは精神科の薬を農薬や化学肥料のように飲んで育てということじゃない

か。でも、それでは人間は育たないのじゃないかと。

だから僕らの目指すのは、有機農業みたいな植物が土の持っているさまざまな栄養を吸収するように、多くの出会いが栄養となつて育つものではないかと。病気を治すという一面が一方ではあり

ながら、生きる力をつけて育てていくという側面がないとやはり本来の姿にはなっていない。

精神病院は病気の人の担当はかなり力を入れてやるんですけれど、人間が育っていく力をつけていくというところにはすごく限界を持っていると思います。だから「べてる」のように医療の枠を乗り越えて大きく踏み出しているところは、土が豊かだという言い方に例えればいかもしれません。出会いの量が多いですから、そういう豊かな場で「べてる」のメンバーが育ってきたんじゃないかなと思つてます。

僕も「べてる」と交わつて育てられてきた一人だと思つてます。「べてる」を通じていろんな世界と知り合つた。僕は田舎にいてこんな人とつながれると思つていなかったし、そういう意味ではものすごく豊かなところにいると実感しています。僕が一人でここでどんなに頑張つても、医療という枠のなかだけで狭苦しく病気のことでやっていたのでは、こうならなかったという気がしますね。

トラブルを楽しむ

べてるのみんこ

しゃべってるかい?

FAX 通信

べてるでは 毎週、金曜日に「金曜ミーティング」をします。「今週の体調と気分」、「苦勞したこと」など 1人1人が 報告します。先日、金曜ミーティングで みんな ベラベラと 話をしました。あると...

毎週 こうやって しゃべってよ
病気を 治してるんだわ?



治してるわけじゃ
ないんだわ。

そくいや
治った人は 本当に
1人もいないな



しゃべってるだけで、安心するんだな。
1人1人の苦勞してることや、がみかんでいるところを
みて、応援したり、一緒だねと思ったりして、
しゃべると みんな 安心するんだわ。



「治せよ」と思うと、腹立ってしかたない
早坂さんを長い間 治して、オレの方が
具合悪くなったよ。だから
治せよとは思われないことにした。
それに、みんな 病気がおあったって、
安心しなさいよ。
病気が バレないかって びくびくしたりしてな。

蒲河じゃ「オレは病氣だ」って
みんなに 言っちゃわってるもんね。
オの方が 楽だ。

医者の子に

「治さより」「しゃべってもらおう」

ほびるへほ

今週のべてるも



F057-0022
北海道浦河町昌平町東通34
べてるの家
TEL (01462) 2-5612
FAX (01462) 2-4707

- 今後の予定
- 2/28 埼玉県戸田町
「ベリ・オティナリー
ピュール」の会
土曜例会 13:00
 - 3/5 本古内町にて
「この町で暮らして
生きるために」
講演会
(早坂、川村)
 - 3/6 江差町にて
「わたしとあなた
が「いぬ」をこ」
講演会
(川村Dr、早坂)
 - 3/6 SST 泉峰
交流会(札幌)
 - 3/3 金沢で講演
(早坂、浜田、山田)

藤谷さん流 彼女のつくり方講座

見た目は いかつい ヤーオン風。しゃべれば、
 ナヨナヨ オ○マ風の藤谷さんですが、どうして
 わけが、しゃべりやう 彼女をつくります。
 こつをきいてみました。

あのねえ、女の人にはよねえ
 まが「目と目をじっと見めあ
 ねえ」「おはようって言ひね
 「調子はどう？」ってきいひね
 「ごはん いしエに 食べめ、
 言ちうのお
 ほう、どエ？」

彼女の出会い
 から 別れ
 までの1ヶ月が
 非常にスピーディ
 この半年びるの5分
 っきあつた??

いがり食堂!
 おいしいよ

① いがり食堂は 日赤病院内の食堂。
 藤谷流 彼女getのひけつ 「はじまりは、
 目と目♡とどめは、いがり食堂」

松本流 彼女のつくり方講座

藤谷さんちがらで、松本さんは、本人の欲求とは
 くらげらに さしおりの 彼女がござりません。そご
 みんせに、おし方法を 考えもらいました。

「よく、もう 女は
 あきらめようかなあ...」

女の人のごとど
 頭はいはひ。し。が、環境因
 には、敏感な
 地球人

松本さんから女と作ら何モ
 のこらないよ！ 彼女募集しなよ
 全国の講義会に行つて、松本の
 いいところを みてきたらいいんやない?

いい種まいたら いいね
 種ね!! 得意だ!

ちよと、かみちが
 してるかも...
 ...とりあつ
 松本さんの
 ちよと、あつ
 下さ

地球にやさしいから
 松本さんは、

② 松本流 彼女getのひけつ
 「春にはたら種をまう」

ヤッほり 入院にも 社長は社長

(有) 福福ショップの社長、佐々木には
 伏見調子をくし、神様のお告げにより入院は、
 10年に1度くる 発病? 降たらく、古い
 仲間たちは、おちついていました。

「10年ぶり
 だわ」
 「薬も
 のんびな
 ったもんね」
 「きよし」

10年前の薬作をしらない人たちは
 びっくりして あつてましたが、具合が
 れるくても、社長はヤッほり社長して
 した。

ヤッほり社長①
 入院した社長は、保護室に入つて
 体かぐりはおか
 さず、うごてるは
 500回をしまつちよに
 手をつきまちがえて、前歯を
 2本 折りました。

ヤッほり社長②
 社長の入院中、岡本さんに身内の不幸
 があつたのですが、岡本さんは 香典に
 だあお金が足りませんでした。そご
 いちも 社長をたよりにしてる岡本は
 まよわあ! 保護室 いる社長のもへ...

ヤッほり社長③
 社長が入院し、会社は大丈夫が前
 社員一同は、おな心配しました。
 ところが、社長が倒れおかけで、さぼりか
 部長の下の下野くんが、メンバーの進退を
 したり、ゆみちくんが店番をしたりして
 「誰かが倒れりや 誰かが走りきり」
 方式でのりきりました。退院した社長は
 「みんなのおかけで 早く退院できました」
 と言つてましたが、せつやくや各々の
 社員たちは、「社長もつとびっくりし
 しいのに」と思つたのでした...

——病院、薬は出会いを奪つてきた歴史なんでしょうか？

川村 病院というのは病氣を持つ人に対して、非常に思いやりのあるところだと思つているんです。ただその思いやりがときに行き過ぎるんじゃないのかなと、それが私たちが自戒しなければならぬことではあるなと思つています。私たちは医療の「分をわきまえたこと」をしなければならぬなと。だから僕は病院は「出来ない」とは出来ない」と限界を示す必要があると思つています。

人が育つていくということについては病院はけつして上手なところではない、そのことは世間との交わり、多くの人達との交わりのなかで生れてくるものだと思つてます。病氣についてはきちんと応援をして病状を軽くできるところは軽くしてあげなければならぬけれど、それ以上のことはもつと多くの人達と触れ合つて、応援をされていると感じることでできる体制づくりが大事じゃないかなと思つてます。そのことが結局、病院という役割を生かすことにもなるし、それによつて精神病の患者さんたちの、非常に条件が悪いなかで本当に一所懸命生きようとして頑張つているという、なんかこういとおしくなるようなところが見えてくるんじゃないかなと。

僕らは、そういう関係を目指してきたから、「べてる」の人達、精神病の人達もだんだんよく見えるようになって、愛すべき人達、友達として良い人達というか、僕は、もう、札幌時代よりはまったく公私混同になっています。でも、それでなんら問題は起きません。むしろ今の暮らしの方がはるかにいいなと思つています。

——出会いの中でトラブルが増えるのではないですか？
川村 細かいトラブルを数多く積み重ねた方がもつといふなという感じがします。

僕が心配するのは、トラブルを起こす、つまり失敗するチャンスも与えられてこなかったということ。チャンスを与えられない人間がどうなるかというのは、これは病氣の人であろうがなろうが関係ありません。僕も失敗しないように失敗しないようにと思つたときにいつも人生の中で大きい失敗と出会っています。

自分の病氣や弱さを隠して頑張つてという無理な生き方は続かないだろうなと思つています。それは治療する側にもそういうやり方を強要しているような一面もあると思います。病氣さえ良くなれば何かいいことがありそうなの、そういう幻想が僕らのなかにはあつたような気がしますので、僕らも目を覚まさなければならぬ

など思ってますけど、今はその途上にあります。けつして完全にはなれませんし、目指してもいません。これからも失敗していくでしょう。

偏見を持たざるをえない健常者を理解しよう

川村 医者 of 社会復帰も手伝うというのが「べてる」の考えですから、私自身も、「私が社会復帰できているか、できていないか」というテーマを持っていますよ。僕は最初はやはり、病院の中に閉じこもって、狭い枠の中で患者さんを管理する、薬をいっぱい飲ましていけば治療しているという気持ちになってましたからね、笑顔で。

怖いですが、世間と交わるのが。当時は精神科医の医者なんて、医者の中でもランク低いですよ。内科、外科の先生は自分や家族が世話になると町の人は誰でも思ってますからランク高いですよ。でも、精神科にかかると誰か思ってますから、必要ない人間ですからね。それは精神科自体が低く見られることと同じですよ。もつとも精神科病棟の中に患者さんを閉じ込めて、周りから見たら秘密めいた理解不能なことをしていたのですから無理ありませんが。

だけど精神科と「べてる」の人を通じて、この町で生きることの大事さ、人のつながりの大事さというのが広まっていった、精神科のやる事がぐーんとレベルが上がってきていると思います。我々からすると、「べてる」のやつてくれたことの実績というのに非常に感謝してますね。

そして彼らは良いセンスもっている。精神病の人達ってセンスがいいなど。弱いけど、病気持ちっているけど、生きることに關して何が大事かということが一番見えてくる人達で、そういう意味でセンサーのような人達だと思ふ。我々健常者は鈍いから、センサーがなくても時に強引に生きていっちゃうんですけど、べてるの人は弱いがゆえにそのセンサーを持っていて、そのことで貢献している人達ではないかなと思ふんです。その彼らはあくまでも病氣という前提があるので、ときにトラブルを起こしますけど、それは、ま、人間は生きていけば失敗するものですから、ことさら、危険か危険でないかということだけを問題にして語るといふのは、精神病の人達をそれこそ誤解してしまうことではないかなと思ふます。

世間の人達が精神病の人達に偏見を持っているから、それをわきまえて行動しようね。「偏見差別を持っている

かないとやっていけない健康者」を理解しようと、そういうセンスを精神病の人達は磨いているんですよ。精神病の人達が偏見差別を持たれないようにではなくて、偏見差別を持たざるをえないような人達を理解しよう、とだから、精神病は怖いよ、と彼らが自分で言う方がいいのではないかと思いません。

自分でも病気は怖かったと思いますしね。どうしたらいいのか、抑えが利かないこともあるし。だからその病気との付き合いがうまくなってきたぶんだけ、笑ってあげたり安心してあげられるんです。そして、人とつながって相談できる人がいることが、自分自身を安心して暮らさせる方法なんです。

病気の辛さを自分の体験として語れる力がついたり、そういう体験を皆で語れる場を持つから、もう大きな失敗やトラブルを自分で防いでいけるようになるんじゃないでしょうか。「べてる」の人達はそうですよ。大きな失敗がなくなっているのは、自分の体験を聞いてくれる人、あるいは失敗しそうなとき相談にのってくれる人がいるからです。さあ、頑張りなさい、薬を飲んだから、ご飯食べられたから、夜眠れたから大丈夫、というだけでは安心して生きていけないですから。■

femix 通信制講座のご案内

フェミックスの講座に興味はあるけれど、スケジュールが合わない、遠方で出かけられないなどの理由でご参加いただけなかったあなたにぴったりの通信制講座です。カウンセリングと同様、受講される方のプライバシーは厳守します。

□通信制「CR (コンシャスネス・レイジング) 講座」全12回 (月2回、6カ月) 25,000円

グループワークの一つであるCRを、4~6人のグループで手紙の形式で行います。毎回一つのテーマ(女らしさ、母親、仕事、夢、お金など)について綴っていただき、フェミックスに送ってください。グループメンバー全員の手紙をまとめたものと、次回のテーマをお送りします。

□通信制「自己尊重トレーニング」全12回 (月2回、6カ月) 30,000円

自分を好きになりたいけれど、なかなか難しいというあなた。自分をケアするのが得意になってください。自己史を書く、完璧度テスト等の課題の他、日常での実践報告によってすすめます。

□通信制「自己主張トレーニング (AT) 講座」全12回 (月2回、6カ月) 30,000円

言いたいことが言えなくてイライラしたり、自分を責めていませんか? 表現したいけれどできないこと、苦手な分野を発見して、日常生活の中で実際に課題を実践し、その報告を手紙ですという形式をとります。内容は個人によって多少異なります。

□通信制「やりたいこと探し講座」全10回 (月2回、5カ月) 20,000円

自分の好きなこと、やりたいことを楽しみながら探しましょう。現在の自分を点検するところから始めます。「意外な私」に出会ってみませんか?

◎お問い合わせ・お申し込みはフェミックスまで **TEL 03-3424-3603**
◎電話カウンセリングははじめました。 **0990-511320**

〈問題縁〉でつながる

岡村聡子さんと鶴田桃江さんのお話から

バイバイ密室育児

NABA

稲邑恭子
フエミックス

〔投稿〕 自助グループの暗黒面について 岡村聡子

横浜市戸塚区にある「横浜女性フォーラム」は調理や木工、アートのワークショップなど多目的に使える広々とした「生活工房」のスペースを持ち、フィットネスルームや相談室も充実し、ソフト面の質の高さが随所にくかがわれるゆったりと居心地のよい女性センターである。

同フォーラムは、九六年から、公募による市民の自助グループの支援事業にとりこんでいる。悩みをグループで話し合い解決していく自助グループの社会的ニーズの増大にいち早く応え、女性センターの資源としての有効性（安全な場を提供するだけでなく、ハード面でもソフト面でもいろいろな機能が使える）をフルに活用した先駆的な試みである。もともとは相談室の仕事から当事者グループの有効性と必要性を感じて立ち上げてきた経緯がある

が、九八年度からは市民活動支援の担当者も合流してさらに力を入れているという。

社会教育の現場でも、講師の話を一方的に聞いて勉強する従来の「承り学習」から「参加型学習」に転換しつつあり、講座の後の自主グループのフォローが課題になってきている現在、女性センターや公民館などの公的施設は、地域の人々が（つながり）を回復していく受け皿としていかに有効に機能していけるかということが、これからの課題として問われてくるだろう。その意味で横浜女性フォーラムにおけるこの地道な試みが着実に実を結んでいることは注目に値する。

一月二四日に横浜女性フォーラムで開催された「自助グループ応援セミナー」問題縁でつながる、力が出る」

に参加してみた。

当日は昨年支援を受けた一六グループのうち一〇グループの代表も参加した。その内の二つのグループによる活動事例発表があったあと、各代表の方からそれぞれ発言があり、最後にNABA（日本アノレキシア〔拒食症〕）プリミア（過食症）協会、事務局代表の鶴田桃江さんへのインタビューがあった。

前年度支援を受けた自助グループは、横浜NABA（摂食障害）、AA港南（アルコール依存）、バイバイ密室育児、神奈川ACOD（親との関係）、育児ストレスふきとばせ、EWA（女であること）、ACODA戸塚女性グループ、グループNORA（離婚）、シングルマザーズフレンドシップ神奈川、よこはま母乳110番、いちばん星（ひとりっ子家庭）、ソレイユ（乳ガン）、日本子宮内膜症協会「横浜自助グループ」、横浜LOVEの会（不妊）、たんぼぼ（子宮筋腫・子宮内膜症）など。

各グループの目的によって話し合いや運営の決まりは異なるものの、ほとんどが「来るのも自由、来ないのも自由」、「言いつばなし、聞きつばなしで批判はしない」などを原則にあげ、本名を名乗らなくても参加できるところが多い。ただ、会の規模や活動形態は様々で、比較

的長い活動の歴史を持つグループの中には、第一土曜日に無料相談を行っている（ソレイユ）、月曜日と土曜日に子宮筋腫と内膜症の電話相談を、身体と性の相談を第三土曜日の午後に行い、ホームページを開設し講座や学習会も開いている（たんぼぼ）、ホームページを開設し電話・手紙相談や研修もしている（よこはま母乳110番）など、積極的に社会的な働きかけをしているところもあった。

ここでは最初の事例発表者の一人「バイバイ密室育児」の岡村聡子さんとNABA鶴田桃江さんの話を中心に紹介したい。（稲邑）

岡村聡子さんのお話から

バイバイ密室育児

「バイバイ密室育児」は九七年六月から活動を始めて一年半になります。参加者は毎回五名から九名ほどで、のべにすると三〇名から四〇名。横浜女性フォーラムの運営協議会委員をしているときに、乳幼児を抱える女性に対する支援が少ないのではないかと言ったところ、相談室のスタッフが取り上げてくれ、自助グループをつくることになりました。最初からきちんとしたコンセプト

があったわけではないのですが、私自身三人の子どもを育てることがとても苦しかったので、今の若いおかささんたちにも共通の苦しさがあるのではないかと思い、「バイバイ密室育児」というストレートなネーミングにしました。

「いいお母さんにならないければ」ということが自分自身の縛りになっていて、それが自分にとっても子どもにとっても良くないのではないかという思いがあったので、「女性役割、母親役割の縛りからの解放をめざす」ということでグループを立ち上げたのですが、その一方では、参加された方がどんなことでも話し合えるような場にした、近所の奥さんや幼稚園のお母さんたちとは話せないようなこと、例えば子どもがかわいく思えないとか、子どもを殴ってしまうとか、楽しく子育てできないとかいう悩みを自由に話せる場にした、と思っていました。

誰からも話が出ないときは自分が口火を切って話し出すと、「実は私も」「私も」と、子どもを殴った話などが出てきて、「ここは何を言ってもいい場」、「育児書に書いてあるようにはできない自分をみんなで語り合える場」になっていきました。

こんなこと決して誰にも言ってはならないと自分ひと

りで抱えてきたこと、「子どもの虐待110番」や「子どもの虐待ホットライン」などに電話したけど通じなくて、誰に訴えていいか分からなかったことが、ここに来たらぼろぼろと口をついて出てくる。悩んでいるのは私だけじゃなかった、そういうことを言っても良かったのね、と。子どもがかわいくなって人間関係に自信を持ってないのは私だけじゃなくてたくさんいるという、そのことに気づいただけでもよかった、と言っただけです。

毎回新しいメンバーが相談室や虐待防止センターや保健所の紹介でたどり着き、話すと、「ああよかった、次のミーティングまでがんばれそう」と言っただけでいく。そうこうしている内に毎回通ってくるコアメンバーの顔ぶれが決まってきて、その人たちの成長にめざましいものがある。みな異口同音に私はAC（アダルトチルドレン）ですと言、親との問題を抱えてはいるのですが、自分の子どもとの問題にはどうも親との問題が関係があるらしいということに気づき、アダルトチルドレンや虐待の本を持ってきて情報交換をするうちに、どうも自分たちに起きている問題は心理的・社会構造的な女性問題ではないかと気づいていく。専業主婦が嫌だから保育園に子どもを預けて働くという結論を出した人が出てきたり、

親との関係をもっと考えていきたいのでフェミニンストセラピーに通うという人が出てきたり、それぞれがまた、そこでの体験をミーティングに持ち帰り発表してくれるので、それがまたみんなを力づけ新しい刺激になっています。

また横浜女性フォーラムで自助グループをやると、相談室があるので、緊急対応が必要な人の場合はすぐカウンセリングの予約を入れられるので安心でした。

先日、メンバーの一人が、いまの子どもの生きにくさや、いじめや不登校、暴力などの問題は、私たちが子どもをかわいく思えない問題と根が同じではないかとポツツと発言し、みんなですくうなずいてしまいました。

当初は密室育児をメインテーマにしたグループだったのですが、グループの成長と共に、自分たちの抱えている問題は単にそれだけではなくて女性問題であり社会問題でもあるのだという認識をコアメンバーの中で共有できるところまでたどりつきました。

私自身、ここに来るとすぐく居心地良くて楽しいし、何を言っても受け止めてもらえる安心感があるから続けてこられたし、成長させてもらっていると感じています。

* * *

先日、子育て中の若い母親を対象とした「子育て講座」に助言者としてよばれる機会があった。ペテランの保育者による保育がついて、保育室からのフィードバックとサポートが非常にきめ細かに配慮された講座だったが、私が子育てをしていたときと比べ、若いお母さんたちの

不安と緊張が強く、価値観がより一層融通のきかないものになっているのに驚いた。私のときもそれなりにあんななければこうしなければとストレスが溜まって大変だったが、それでも「正しい子育てから自分が外れているかどうか」について、こんなに四角四面に悩んだ覚えはなかったから。人前で発言することの緊張は強くても、小グループだと安心して話せてそれが楽しらしく、体験や個性の違う人たちが集まって話すと、うまくいかないと悩んでいるのは自分だけじゃないとそれなりに安心もし、発想の転換が少しはできるようだ。相談事業の充実もいいが、それよりも自主グループを作るように行政で保育つきの場を提供しながらサポートしてあげるのが、当事者にいちばん力がつき、また地域の力も育つ有効な方法なのではと感じている。

その意味でも岡村さんたちのグループはすばらしいモデルケースのように思えたのだが、終わったあとで「私

はグループのいいところばかりを発表してしまった」と岡村さんが語ったので、そのことについて書いていただいた。(稲邑)

* * *

自助グループの暗黒面について 岡村聡子

自助グループ応援セミナーが終わった後、何か釈然としない漠とした思いが私の中に残りました。自助グループとは同じ問題をもつ当事者が集う平場(ひらば)のミーティング、というのが建て前です。でもその平場の中でも微妙な心理的な力関係が働くことも事実です。グループを立ち上げた人、なんとなく発言力の強い人、古くからの常連メンバー。そんな人達が目に見えないかたちで新しいメンバーに場の雰囲気伝えてしまう発言をする、ということとはままたることだと思えます。私はこれを「自助グループの暗黒面」と呼びたいと思います。バイバイ密室育児でも一〜二回だけ参加してプツツリ来なくなった方がたくさんいるなあ……あの大変さの中での人は、あの人は、今どうしているんだろう。応援セミナーで私はグループのいいところばかりを発表してしま

ったけれど、それではすべてを伝えたことにはならない。そんな思いが私の中で日がたつにつれふくらんでいきました。

メンバーの方に「私は岡村さんに会うためにここに来ている気がする」「岡村さんは本当に人間が好きでやさしい人なんですわ」と言われたり、手紙をいただいたことがあります。私は「アツ、マズイ!」と、とっさに思うわけです。今に至るまでの様々な活動の中で自分のパワーの強さ、支配性の強さ故に自分を、他者をスタポロに傷つけて大層痛い目を見てきた経験上、平場の自助グループにだけはそれはもちこみたくない! と思っているのに、そんな思いとはうらはらにやはり体のどこかから支配性がにじみ出てしまっているのだと思うのです。でもまあ、これは私のポジティブな魅力と切っても切れない裏面のダークサイドであるわけで、扱いたいへん難しいところですよ。当面は自分の、そして自助グループという場のもつ暗黒面から目をそらさずにしつかり見つめながらやっていくより他にないのだろうな、と思えます。応援セミナーで発表の機会をいただいていなければ、私はここまで言語化して暗黒面に気づかなかったと思います。女性フォーラムのスタッフの方々、それから「そこ

そこよ、そこをあなたの言葉にしてみてもよ」としつつこく勧めて下さったWeの稲邑編集長に感謝！

* * *

次に鶴田桃江さんのお話を紹介したい。

〈NABA〉は斉藤学さんが始めた摂食障害の「治療的自主グループ」として八七年に発足した。アルコール依存などのグループの人たちが事務所を持って独立していくのを見て、自分たちもやりたいことをかたちにして、自分たちの力を確認していくことが必要ではないかと思いい立ち、九四年に母体であるAKK（アディクション問題を考える市民の会）から独立した。

鶴田桃江さんのお話から

安全な場を求めて

摂食障害の問題は人間関係、生き方の病だと思えます。このままの自分ではいけない、人に認めて欲しいと思つて、良い成績をとろうとか、人に好かれようとか頑張ってしまう。でもどこかそれだけじゃだめなんじゃないか

という気持ちがあつて、いろんなパワーゲームをやつて、負けた後にたどりついたのは、やはり女は痩せていたりかわいいのが得なんじゃないかということでした。それでダイエットを始めたんです。

私はいつも、「どこに自分を受け入れてくれる人がいるのだろう」という感じで安全な場を探して生きてきたのだけど、医者やカウンセラーにかかっても良くなるどころか悪くなる一方で、そうするとまた、親の期待を裏切つたということへの罪悪感と同じように、相手に対して期待に応えられないということで申し訳なく思つてしまふ。好かれない認められないと思うから正直になれないし、しまいには先生を励ますサービスマスまでして、帰りはもう食べ吐きやら万引きやらでさらに悪くなつて家にたどり着くという繰り返しでした。

最初から行きたいと思つたのではなく、他にいくところがなくて自助グループへ行きました。自分のことが大嫌いだったので、自助グループと言われても、自分と同じような人とわざわざ会いたいなんて思わなかった。

ミーティングに通いだしても、最初は、自分と同じ人がいることに安心して正直な話ができても、しばらくするとどうしてもまたいつものように勝ち負けにこだわつ

てしまう。話のうまい人や皆に頼られる人がいると自分の負けだか思ってしまう、話すことも、この話はしていい、この話はしちゃいけないと使い分けしていました。行き詰まったのは通いだして一年位してから。食べ吐きも万引きもひどく、家で暴れ、それでも二重人格みたいにミーティングでは調子のいい話ばかりしていました。

当時は、先生（斉藤学さん）がいたから、先生が自分のことをわかっていてくれればそれでいい、どっちを認めてくれるの、可愛いがっつけてくれるの、という感じで、仲間はライバルでしかなかったんですね。ただ、そういう時期でも仲間からもらえたものは大きくて、性的に傷ついた話とか恋愛関係の話とか、自分自身は正直に話せなくても、仲間が自分の問題として話してくれるのを聴いていて、聴いていても嫌ではなかった。それどころか、力をもらったと感じていました。

そして仲間意識ができて自分たちがやろうと思いはじめると、逆に「先生」が邪魔になってくるんですね。

ただそこについていい

自助グループのよさは、話したり聴いたりすることもそうですが、それ以上に「ただそこについていい」という

ことだと思えます。ミーティングではただそこに座っていればいいし、誰も話することを強要しないし、こう振る舞えとも言われない。一年も二年もしてからやっとミーティングで居眠りができるようになって、「あ、眠っちゃった。眠る私はいけない子」と思っていたのが、仲間「桃江ちゃん、やっと居眠りできるような安心な場所になったんだね」と言われました。他人との会話だと、気が利いたことを言わなきゃならないと思って結構疲れるのだけど、ミーティングは、とにかく「黙ってそこにいるだけでいい」、自分にとって安全な場所でした。

言いつばなし聴きつばなし、プライバシーの厳守が決まりだけれど、いつでもそれが守られるかという結構そうじゃなかったりする。初心者だけでなく、事情を良く知っているがゆえに、つい相手のためと思ってよけいなことを言ってしまうことがあって……。でも、そういう体験をしたことで、「自助グループというのは危険な場所になりうる」ということをしっかり知ったことが、かえって「安全な場を守ろう」という原動力になっているんじゃないかと思えます。

私はもともと自己肯定感が低くて、人に認めてもらいたいという思いが強いので、グループを立ち上げたりす

ると、とにかく頑張つて、我慢しても続けて行かなきゃならないと思つて、どんどん苦しくなる。初めてミーティングに来る人がいると、これは人数を増やすい機会だと一所懸命お世話するようなことをやって、その人のほうもこれだけ親切にしてもらつてから頑張つて来なくちゃと思うから、お互いにどんどん苦しい関係になる。初めての人が訪ねてくるたびに自分の病を深くするようなお世話やきをやっていると身が持たないし、その人の回復も遠ざかると思つたから、それでビギナーさん用にウエルカムミーティングを始めました。最初に、ミーティングにしばらく出ている人に自分の体験談を少し長めに話してもらい、その後初めて来た人に一言でいいから話してもらう、しゃべりたくない人はしゃべらなくていいというかたちでやっています。

自助グループの運営に関しては、きちんと確立されたルールを持つている所もそうでない所もあるようですが、ルールに縛られることなく、「私たちはこうしたいよね」とメンバーの中で相談しながらやっていきたいと思つています。

それにグループだつて何十年も続ける必要はない。その人がそのグループを必要としている間だけでできればい

いし、必要だつたら残つていくだろうし、必要じゃなかったら消えていくだろうし、また必要になつたらやろうという人が出てくるだろうし……と思つています。

自助グループといつても様々で、ミーティングだけで社交は禁止というグループもあるし、お友だちづきあいをしているグループもあるし、人との距離の取り方は悩みのタネです。傷つくと言つても本当に個人個人、皆それぞれ違いますから。私なんか症状がひどかったときに「桃江ちゃん元気そうだね」と言われるだけで傷ついていたんですが、それは良くなつていく時のほうが、またもとの一所懸命な自分に戻らなければならぬということとで怖かったから。私は世話焼き病なので、「あの人傷ついたらのじゃないか」と思つてフォローしてしまいがちで、そうすると、こちらはいつもお母さん役で、相手は「私の言うこと聞かないと見捨てられちゃう人」になつて固定化した「共依存」の関係が続いてしまう。

ですから、この頃は意識的にその人の力を信じることをしています。たとえ私との関係がだめになつても、その人は自助グループなり医療機関なり自分の必要な場所を、時間はかかつても求めていく力があるからと、預けるつもりで手放します。

手放せないときは苦しかったですね。それに私との関係で傷ついたとよく言われるんです。いまでも毎日毎日、電話や手紙が来て、「半年前のあのときの桃江ちゃんの時つきは怖かった」とか。そのくらいたつと言えるようになって言ってくるということですが、そう言われると私も傷つくけど、今ではそういうこともあるんだなと思います。自分も同じようなことやって来ましたから。けっこう人間って生きる力を持っているんだなって。だから腹を立てたり傷ついた傷つけられたという関係や体験もまた必要だと思っています。

私の場合、親密な関係になったときに自分の問題が出てきてしまうので、親密な関係の中でいかに自己主張、自己表現できるかということが大事だと思っています。でも自分の癖がそういうものだと分かったら、トラブルもだんだん回避できるようになります。

私の場合、はつきりと摂食障害というかたちで現れてくれたことで、自分の問題に自覚的になれたし、自助グループにもつながりやすかった。自分が摂食障害でしか表現できなかったのは言葉を知らなかったからだし、狭くてとても堅苦しい価値観の中で生きてきたからだと思いますが、それでも、女性は男性に比べれば、井戸端

会議的に集まって自分のことを語る能力がありますよね。私自身も、今はもう摂食障害の症状では悩んでいないけど、生きづらさとか人間関係の問題は残っています。女性は、それぞれの年代で悩みの種は変わりながらも尽きなく出てくるでしょう。自助グループをやっている人たちは自分を諦めない人。そういう自分を諦めない人たちがいろいろなグループをつくってくれているから、私も困ったときそこに行こうと思えば行ける、そういう希望をこの場でもらえたことが嬉しい。今度はぜひグループをやっている人たち同士、ミーティング形式で悩みを分かち合える機会があればいいなと思います。

* * *

鶴田さんが主になって編集するNABAのニュースレターは、仲間たちが深刻な話をあつげらかんとユーモラスに書いていて、読んでいてほのぼのとした気分になる。編集方針も、起きてくる事件や問題をオープンにして、ポーンと投げ出して潔い。「私、いま緊張しているの」とか「期待に応えちゃうんだ」とか、その都度感じる自分の〈危うさ〉をさらっと言葉にして投げ出すことで相手

との間合いを微調整しながら生きる鶴田さんの、その絶妙なバランスの取り方に、いろいろと危機的な状況をくぐり抜けてきた人の〈知恵〉を感じる。(稲岳)

* * *

NABAの連絡先は〒156 東京都世田谷区上北沢4-19-12 シャンポール上北沢212 (☎03-33302-0710)です。資料請求の場合は、摂食障害のご本人でしたら90円切手一枚を、家族並びに関係者は80円切手を5枚貼付した返信用封筒を同封してお申し込み下さい。

NABAの小冊子『いかげんに生きよう——拒食・過食は私たちのメッセージだった』は、NABAの誕生からの歩み、現在の活動、集まっている仲間の様子などとともに、何が大切なのかということ、本人たちの経験を生かして書かれています。ご希望の方は郵便振替(00110-7-366019 加入者名 ナバ)にて、「小冊子『いかげんに生きよう』○○部希望」と書いて、一部につき1000円+送料240円をお振り込み下さい。

なお横浜女性フォーラムではこの「自助グループ応援セミナー」の記録集を製作しました。他の自助グループの方の話など、ここでご紹介できなかったこともたくさん載っていますので、関心のあるかたはぜひお問い合わせください。(☎045-862-5052)

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は

伸びつづける。



世の中に？を
もち始めた
男たちにも。

新聞代 (送料込)	
1ヶ月	750円
3ヶ月	2,250円
6ヶ月	4,500円
1年	9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

女たちの情報紙
ふえみん
f e m ♀ n
婦 人 民 主 新 聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

からだのしんばいはたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのうづき
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなたのいけん
おんなという
ちから。

創立以来、無党派の立場で50年。
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 大阪府 大阪市北区中崎西3-1-5
TEL 03(3402)3244, 3238 TEL 06(371)2429
FAX 03(3401)3453

ふえみん 婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集

ほくは家族が怖い²

一人ひとりが選びとる居場所

中村英之

W e 兵庫の会

父親が死んだ。その生育歴などゆえにA C（アダルトナルドレン）であり、怒ることでは自分の感情を表現できなかった不器用な人だった父親が死んだ（「W e」95年4月号）。寝たきりにはならなかったものの、ここ数年は襦袢（おしめ）が必要で、入退院を繰り返し、目に見えて衰えていった。自分一人では食事のままならぬのに、ベッドの上から相変わらず母を怒鳴りつけていたらしい。

自分をそんなに怒鳴り続けてきた父を、母は「やさしい人だった。立派な人だった」と言う。確かに自分一人の稼ぎで親兄弟と家族の面倒をみてきたのだからまったくの冷血人間であったわけではなく、「立派な人」と言えるのかもしれない。でもほくは、そんな父を見ながら家族は持つまい、少なくとも婚姻制度に入ることと自分の子どもを持つのは止めよう、と思うようになった。家

族であることは子どもの立場からは選びようがないが、自分より下の世代はつくるまいと思えばつくらなくて済むからだ。

暴力こそほとんどふるわれなかったものの、母は、「おまえはダメだ。だれが食わしてやっているんだ」と言われ続け、自立心を育む芽さえも摘みとられていったようだった。また、自分の子どもは夫との間にできた、いわば、半分ずつ血が入っているに違いないのに、ほくが口答えすると、父の味方をしているとつた母は「どうせお父ちゃんの子やから」と言うのが口癖であった。そして父の経済的な支配下にある自分を「何もできない人間」だと思いきよようになっていったのだと思う。いつ夫の雷が落ちるやもしれぬとひやひやしどおしの日々を送りながらも、雷が落ちるのは自分にも非があると。母もまたバタードウーマンであった。

自分の母親から手をあげられたように、妻に向かって言葉の暴力を浴びせ続けた父。そんな父から逃れることも、対等な関係を主張することもできなかった母。逃れられない家族——そう、家族は逃れられないものだ。

思えば、父は同居者にいたわりの心を持つたり家事を分担する（大正生まれの父は家ではもちろん座ったままで）という、家族を持つ者として当然のことができなかったという意味で夫には向かない人だった。母もまた、夫に反発することのできない従属するだけの無力な人間に自らを貶めてしまったという点で妻には向かない人だった。お互いが対等な関係を結べないという点で、夫婦としてあるのに不向きな人たちだった。

これが夫婦間だけのことなら、被害は当人たちだけで済む。しかし対等でない夫婦関係は下の世代、子どもや孫へと波及する。こんな夫婦にはなりたくない、結婚はしたくないと思ひ、親子関係はそもそもいらないのではないかと、家族そのものの否定に結びつくこともある。子どもに話しかけたり接触することが苦手だった父は、暴力は振るわなかったという点でまだましだったとしても、なかには子を虐待したり遺棄する親もいる。あるいは血縁ゆえに互いを縛り合っとうまくいかない親子関係

もある。もともと一人で引き受けることなどできないことの責任を家族内で背負い込んだ悲劇的な例が、子殺し、親殺しであろう。

そう、人は年をとったからといって立派な大人になれるわけではないし、親になるにはあまりにも幼稚で子どもを持つことに向かない大人もいる。またその親の子どもであることがその子にとってマイナスのこともあるのに、その親の下で成人くらいまでは育たざるを得ない。「親子」でなければよかったという組み合わせはたくさんあるだろう。子は親を選べない、そのことが問題なのだ。

昔、夫婦別姓運動をしていたとき、結婚するまでは対等だったのに結婚したとたんに対等でなくなつた、あるいは子どもができて女性が家に引きこもり、独身のときの淫刺さを失つたという例を見てきた。ぼく自身の身近なところでも、同居人の母親は若くして夫を失い、続いて夫の母を見送つたが、悲しみよりも夫の係累から逃れられるという喜びを大きく感じていたようだ。解放感に包まれた彼女は、夫の「家」を出て高層マンションでの独り暮らしを選択し、写生旅行や陶芸と趣味に忙しい。

が、彼女もそれができるまでに40年近くかかったのだ。

また、『We』を通じて知り合った仲間の中には、別れたことで彼の親との同居や関係が切れたために、彼自身との関係がうまくいき、情緒不安定だった子どもも元気になったという女性もいる。一人で生きる厳しさと楽しさを示してくれる人もいる。

子どもがいると、配偶者と別れたり、配偶者が死んだりしないと「一人である」ことを選択できないのは不合理ではないのか。一度自らが選択した婚姻や出産という血縁関係の形成に、自身がずっと縛られ続けるというのは理不尽ではないのか。「一人」と「二人」が出会い、初めてカップルとなる。子どもも「一人」の人格を持っている。けれど、この国では「一人」である前に「二人で一つ」、あるいは「家族は一つ」であり、その基本には血縁というものがある。

家族のつながりは、緩やかなときも堅固な時もあった。いい。けれどもそれは「血縁」である必要はない。たとえ血縁であっても、家族は自明のもの、絶対的なものではない。そこから逃れ、解散する用意、そう「家族解散式」だって必要だ。家族とはそもそも流動的なものだととらえ、それぞれの人がその時々で選べるようになれば

いい。

もちろん子どもにもその選択権と機会はあるべきだが、そのためには非血縁家族のモデルが求められるだろう。(個が基本)をキーワードに、子どもの頃から「あんな家族もあるんだ」「こんな家族もあるんだ」と、多様な家族像を知ることができること、そして実際にいろんな家族とつき合うことができることが必要だ。

あるいは既存の家族から逃れるためのシエルトアだつて必要だろう。子どもも大人も、「家族に疲れたらここにおいで」という居場所が、しがらみを離れ(シングル)にいつでもなれる溜まり場が。人は誰しも最後はたった一人きりで生き、そして逝かなくてはならない。その孤独や淋しさとうまくつき合い、共存するため、そして「一人」であることを見つけ、受けとめてくれる居場所が不可欠だと思うのだ。

家族である、という前にどんな家族をつくるのか、あるいはつくらないのか学ぶこと——父の死をきっかけに、ぼくはそんな居場所を選びとるため(「一人」で生きる)と同時に(「みんな」と生きる)ということを考えている。

(なかむら・ひでゆき/W e兵庫の会)

オホーツクの潮風荒く

十

困ったときの「発ネタ」番外編

●江口凡太郎

3学期から職場に戻りました。半年間の育児休業はあつという間に終わりました。子どもとの毎日は本当に楽しくて、一生このまま主父、時々主夫でいたいと本気で思いました。3学期の始業式が近づくにつれ、学校に戻るのが本当はとても憂鬱でした。

始業式、「せんせい」廊下で会う生徒が次々と声をかけてくれました。授業に行った教室では「せんせい、話し聞かせて、子ども今どうしてるの？」などなど、俺はいつたい何が憂鬱だったのか自分でもわかりません。確かなのは、私が日々接している高校生は、とっても気持ちのいい

連中なんだということです。

さて、今日は久しぶりに工業科のやんちゃ坊主と調理実習、皮から作る餃子です。ところが、チャイムが鳴っても大量に保健室から出てこない。呼びに行つてやつとはじめれば、説明はほとんど聞かないで、野菜を切れば二刀流とかでどかどか切つてる……。

でも、なぜかどの班もそれなりに餃子らしくなっているから、あら不思議。でも、なぜか「ハンバーグ餃子」や「餃子そぼろラー油入り激辛炒飯」など謎の料理も一部でつくつており、これらは禁止するべきがありません。

どつと疲れて出来上がった餃子を生徒と食べていると、なぜかとても美味しく「うまいなあ」と言うのと、毎度お騒がせK君が「せんせい、俺の、もつ一個食べてや」。彼らはこんなにいる子なのに、時としてはなんでめちゃくちゃなのか？一息きついたのでつかの間、後かたづけがひと仕事。

さて、最後にゴミを片づけているとなんとびっくり、生ゴミに食べ残しがまったくくないではないか！

教員生活8年。これまで、何十回調理実習をしたかわからないが、食べ残しがまったくくないのは初めて。自分で作ったものでも「うまくなえ、

残していい？」というのがごく普通のこと、全て食べ尽くすことは簡単なことのように、とても難しいのが現実です。

二刀流や激辛珍メニューは授業本来の目的からすれば「困ったこと」なのですが、それらも全部食べて、ある意味で「責任」をきちんとはたし、筋を通している彼らの新たな魅力を発見しました。彼らは、なかなか神秘の世界です。

困ったときの一発ネタ編―番外編

一発ネタシリーズは予想以上に反響があり、自分でも驚きました。リレー式連載でぜひ続けていきたいので、自薦他薦のネタを編集部までお寄せください。

さて、今回はこれまでの連載分の補足と読者からの情報を紹介します。

98年11月号で紹介した失敗ネタの

「新車購入費計算」では自動車の自賠責保険料を無批判に計算する授業だったのですが、先日図書館で借りた本『自動車保険』（朝日新聞社刊）著者お忘れしました）をななめに読んだら、自賠責保険制度にもいろんな問題があることが書いてありました。次に授業するときは、もっと勉強しなければいけないと痛感しました。

98年12月号で紹介した「女のつく漢字」について読者からおもしろい参考文献を紹介されました。『ことば』に見る女性―ちよつと待つてその「ことば』（監修：井出祥子、編著発行：（財）東京女性財団、発売：クレヨンハウス）。

この本最初の扉に「嬬」と「嫩」が出ており、この授業のネタ本そのものという感じ。漢字だけでなく、国語辞典を読み込み、女性差別的な表現を徹底追及している。あまりにすごいので一部紹介すると、あの

「広辞苑」第三版（岩波書店）の例文引用で「しかし」の中で「彼は少しも勉強しない。――成績はよい」「彼女は美人だ。――頭が悪い」。これが、天下の「広辞苑」が「しかし」を説明するのに使っていた例文だということからびつくり。いずれせひ、授業にしてみたい。（えぐち・ぼんたろう）

* * *

他にもたくさんお便りいただきありがとうございます。お便りは、返信用封筒に必要な分の切手（190円）を貼り同封して下さい。お便りを下さる方の中には、切手をたくさん送って下さったり、後から現金を送付して下さる方もいて申し訳ないです。中身を入れて出せばいいだけの返信用封筒を送ってください。一番ありがたいです。よろしくお願いします。

北海道紋別市南が丘町6-2-31

江口凡太郎（E094-0013）

家庭科―風が変わる、匂いが変わる

多様な家族をめぐる

●石橋満里子

「マスオさんとアジ子さん（マスオさんの愛人という設定）の関係の深さ、マスオさんとサザエさんの関係の深さで相続配分を決めるべきだと思います」。熊本大学中等家庭科で、「戸籍における子どもの法的身分」という授業をしたときの、非嫡出子と嫡出子の財産相続の配分についての討論の中で発言です。なるほど、そんな考え方もあるのかと妙に納得してしまいました。

「関係の深さはどうやって測るの?」「同居した年数で考えます」。これは法律的な発想です。でも、多くの財産を持つ人がたくさんの人と深い関係を持っていたらたちまち財産はなくなってしまうなあ……と考えながら聞いていました。しかし、こんな発想が家族の授業をしていて面白いのです。

「熊大で授業させてもらえませんか」

98年3月に自由の森学園を退職し、福岡県久留米市に戻

ってきました。私が高校でやっていた授業を大学でやるかどうかの反応になるかを知りたくて、熊本大学の桑畑美沙子さんに、授業をさせてもらえないかとお願いました。「いいよ」といとも簡単に引き受けていただき、教育学部中等家庭科の林さんのクラスで5回授業をすることになりました。中等家庭科の学生は十五人。大学三年と四年の女子だけの合同クラスです。

授業をするとなると、段ボールを開け、資料とノート探しから始めなければなりません。仕事をやめて以来久しぶりの授業に緊張します。

『家庭科ワークブック』（国土社）のいろいろな生き方、暮らし方のイラストを使って、十四のパターンの家族を、家族だと思ふものと、家族だと思わないものに分けさせ、なぜそう思ふのかの理由も書いてもらいます。（『We』97年11月号19～21頁参照）。この意識調査は事前にやってみて結果をまとめて授業に臨みました。それを一つの表に

まとめると、そのクラスの学生たちの「家族」に対する意識が見えてきます。

学生の意見を一つの表にまとめる作業は確かに大変なのですが、ワープロに打ち込むことで一文字一文字が私の中に刻まれていく気がします。既に読んでいても改めて発見するものがある、この楽しみが私をワープロに向かわせるのです。

まず、十四の暮らし方に対して家族であるか否かがはつきりと分けられていました。以前に高校(自由の森学園高等部)で同じ調査をしたときには、子どもたちに分ける過程で迷いがありました。白紙で出している子、表を無視して自分の意見をいっぱい書いている子、文章から見ても迷っている様子が感じられました。が、今回は分けることへの迷いが感じられませんでした。その点はひとつ気になったところでした。その他の感想の欄を設けていたのですが、15人中2人だけ書いていました。それを読むと分ける過程で家族とは何かに揺れが見られます。

《すぐく難しかったです。「家族」って何だろうと改めて考えました》《家族の形態というのは本当に様々で、「これこそ家族」というような定義はないように思う》

「家族であるかどうかを判断したもの?」

血縁、法律的なもの(戸籍)、複数であること、この三つは必ず子どもたちが家族であることを判断するときにごだわる観点です。この自分の持つ家族へのこだわりが気づくこと、そして血縁関係のない人々がどんなつながりを持つたら家族といえるのかを考えていきます。

そこで、国際養子縁組を扱った番組のVTR「幸ちゃん」は2歳たった一人で海を渡った(日本テレビ、TBS「幸ちゃん」1990.2.11)を見ます。このVTRを見ることで〈血縁〉という概念が簡単にひっくり返り、そこで、自分が何故〈血縁〉にこだわっていたかと考え始めるのです。

このVTRは日本では養子への偏見差別が強いので親子関係がうまくいかない、しかしアメリカでは小さいときから養子であることを子どもに知らせるから親子関係がうまくいき幸せになる、という結末になっています。番組の筋書き通りの感想がでてきますが、中には次のような、子どもの側に視点を置いた感想もありました。

《VTRを見ていて、ずっと感じていたことは、幸ちゃんの人生を、幸ちゃんでない人が決めてしまうことへの疑問です。でも、養子縁組は幸ちゃんにとつて悪いことではないし、結局何が最善なのかは、幸ちゃんにしか分からないのだろうと思いました。》

海外に養子に出すほうが、日本よりもいいとは思わない

し、悪いとも思いません。ただ、養子であるということがその人を不幸にしないような社会でなくてははいけないと思います。日本では、養子に対してあまり好感を持っていない気がします。私は深く考えたことはなかったけれど、VTRを見ていて「養子」ということについて少し考え始めました。

血縁や法律など、「家族」の定義にいろいろな意見があったけれど、たくさんケースがあつて、本人や周りの人々の考えも考慮すると、私にはほとんどんわけがわからなくなりました。今後の授業でまた考えたいです。》

次に、資料（『海を渡る赤ちゃん』朝日新聞社）に基づき、国際養子縁組の実態が各国の経済状態、政治状態と深く関わっていること。国際養子縁組の子どもの流れは発展途上国から先進国へ行っているのに、先進国であるはずの日本からなぜかアメリカへ年間五六〇人の子どもが養子として行っていることなどを説明します。日本の母親が国際養子に出す理由のひとつが、「汚れた」戸籍を「きれいな」戸籍にするために、転籍のマジックを使って未婚で産んだ事実を戸籍から消すことにあるのです。

ここで国際養子縁組に対する「良いイメージ」が翻ります。自分の考えがころころ変わっていくのです。と同時に

学生は転籍の事実を知ること、戸籍とは何だろうと戸籍に興味を持つようになります。

そこで、法律の問題を取り上げます。

日本には普通養子制度と特別養子制度がありますが（31ページ参照）、その問題を考えるために日本の養子制度についてのクイズを出します。○か×かで自分の考えをひとつに決めてから解答を聞くのですが、クイズをすることによって制度だろうと興味を持つことと、自分の意見を当てずっぽでもひとつに決めてから考えることで理解が深まるようになります。

次に、血縁のないつながりとしての養子との暮らし方を考えながら戸籍の授業に入ります。

「きれいな」戸籍「汚れた」戸籍、戸籍はなぜ作られたか？ 戸籍とは何か？ とすすみ、戸籍クイズをします。このクイズの解答として、戸籍のしくみについて、同氏同戸籍の原則、三代戸籍の禁止、公開の原則の3点について説明します。この授業で、血縁があっても必ず同じ戸籍にはならないことがわかり、法律でつながっているのが家族だという考えがまた崩れていきます。

実は戸籍の授業はこれまで九〇分三コマを使い実践してきたのですが、時間の関係でそれを一挙に二コマに縮めてしまい、まさに特急の授業で、さすがに大学生といえども

親子関係を形成する養子法

- ※養子法の変遷
- ①家のための養子 (後継ぎ養子)
 - ②親のための養子 (慰め養子)
 - ③子のための養子 (子育て養子)

	普通養子縁組	特別養子縁組
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・氏の存続のため ・老後の扶養のため ・財産相続のための 実態は の傾向が 強い	<ul style="list-style-type: none"> ・監護に欠ける幼少の児童に親を与え実父母との関係を断絶させる ・児童の福祉のため
成立条件	養親となろうとする者と、養子となろうとする者とが合意して、縁組届けをすること (届出型)	家庭裁判所の審判によって成立する (民法817条の2第1項) (宣言型)
養親の条件	<ul style="list-style-type: none"> ①養親は成年に達していなければならない (民法792条) ②自分より年少者であっても、自分の尊属を養子にすることはできない (民法793条) ③配偶者のある者が未成年者を養子とする場合は配偶者と共同で縁組しなければならない (民法795条) 	<ul style="list-style-type: none"> ①養親は、原則として25歳に達していなければならない。 (民法817の4) ②養親となる者は配偶者のある者に限られ、夫婦は共同で養子縁組をしなければならない。 (民法817の3) ③養親となる者が養子となる者を6ヶ月以上の期間監護した状況を考慮しなければならない。 (民法817条の8)
養子の条件	<ul style="list-style-type: none"> ①養子の年齢については、養親よりも年長であってはならない (民法793条) ②未成年を養子とする場合には、それが自分または配偶者の直系卑属でない限り家庭裁判所の許可を得なければならない。 (民法798条) ③養子となる者満15歳未満の時はその法定代理人すなわち親権者ないし後見人が養子に代わって縁組の承諾をしなければならない。 (民法797条) 	<ul style="list-style-type: none"> ①養子となる者は6歳未満でなければならない。 (民法817の5) ②養子となる者の父母の同意が必要である。 (民法817の6)
離縁	縁組の当事者が協議により、離縁届をだすことにより離縁できる。 (民法811条1項)	離縁は原則として認められない。 (民法817条の10)
実親との関係	法律的な関係は完全には切れない	法的には完全に切れて、養親のみの子となる
戸籍の記載	養子あることが記載されている 続柄 — 養子、養女	実親としての記載となる続柄 — 次女、長男

川井 健 編『民法入門(2) 家族法』有斐閣新書より (作成 石橋)

知識詰め込みになってしまいました。

子どもの法的身分

最後に「子どもの法的身分」という授業で終わりました。「戸籍では子どもに嫡出子と非嫡出子という違いがあるという授業です。マスオさんの愛人がアジ子さん、その子どもがウニちゃん（非嫡出子）という設定でタラちゃん（嫡出子）との相続に違いがあるのは差別になるかならないかを論議します。学生はウニちゃんの立場、タラちゃんの立場、サザエさんの立場、アジ子さんの立場に立つて考え、ウーソンと考え込んでいます。どの立場に立つかで判断が変わるのです。

「マスオさんは死ぬ前に誰と住んでいましたか？」という質問が出ました。そして、「サザエさんと住んでいたという前提で考えようか」というと、サザエさんとマスオさん、アジ子さん、マスオさんの関係の深さで相続配分を決めるべきだという意見が出たのです。法律を決めていく時に、どんな視点で決めたらよいのかを学生なりに法律を作る過程をたどりながら考えているのです。

この授業のはじめに、子どもの法的身分——嫡出子か非嫡出子か——は親の婚姻状況で決まることを話していたのですが、「子どもは自分の出生に責任がない」ということ

になかなか気づきません。しかし、違う観点ですが、「子どもとして同じである」という考え方をしている学生もいました。「マスオさんにとつては、ウニちゃんもタラちゃんも同じ子どもである」と。

実は、ここに行くまでを丁寧論議してすすめるべきなのですが、学生の意見にそつてどういふ言葉をかけていくか、ここが勝負どころだと思いつながら、なかなかうまくいきません。そんな授業でも同じ場にいる学生の意見を聞きながら、きちんとした結論を出すことを急がず迷いながら考えている感想がありました。

《今回の講義で、タラちゃんとウニちゃんの相続についていろいろと考えるところがありました。いつも本題とは違うところに興味を持ってしまつたのですが、今回は「人間のSEXとか子を産むとかいうとても動物的なことを法律によつてきめてしまうのはすごく難しい」ということを強く感じました。ワイドショーの言えは「妻子ある男性との子どもだから」ということで、ウニちゃんの立場もアジコさんの存在すらも弱くなってしまいます。しかし、ウニちゃんには何の責任もありません。けれどもタラちゃんだつて、本来なら相続できたのに、父親が浮気をしていたためにくやしい思いをするのでしょうか。子どもは親を選べないのに、親の行いの尻ぬぐいが必ずめぐつてくるなんて、腹

が立つことです。が、マスオさんとアジコさんだって「許されない」とは言い切れません。私には今はわからないけれど相手に妻子があっても、また自分に妻子があってもSEXをしてしまうことがあるんだろうと思います（自分がサザエさんだったら「許せない」と思うけど）。そういう愛情とか動物的なことも法律等で「こうしなさい」と決めておかないと、社会は成立しない……わかっているけど、考えがまとまりません。全ての人にとって生きやすいようにするためだから、我慢しなければならぬこともあるのは理解できるのですが。結論としては、タラちゃんもウニちゃんも同額を相続するのがいいと思います。そうでないとウニちゃんがかわいそうすぎるからです。

明治時代の「姦通罪」の話には本当に腹が立ちました。人間は全て女から産まれるのに、女を「無能なもの」とするなんてひどすぎます。これから社会にでて、女だからということであるいろいろな困難があるかもしれないけど、まけないぞと思いました。》

最後に

この授業の最後に課題を出して、自己評価表を書いてもありました。家族についてきちんと結論を出している学生はいません。むしろもっと自分と向き合って揺れて考えて

います。

今回の授業の過程で、学生自身が自分の中にある枠に気づいて、それを壊していきながら自分の中でまた新しい考えを構築していく姿を見てきました。多様な生き方を認められるようになるためには、これという方法論はありません。しかし、家庭科の授業に限らず、教育現場で子どもと接するとき、教師が多様な生き方、暮らし方を認められるようになれば、子どもたちの後ろにある多様な家庭、家族に関心を持つことができるのではないのでしょうか。そのことで目の前にいる子どもとどうつきあっているのかという答えを見つめるきっかけができるのではないかと、これまで実践してきた感じました。

5回という凝縮した授業の中で、授業で学ぶことの意味と、他人の意見を知ることでの自分の考えが作られていくのだということに気づいてくれたらと思いつつながら、熊本から高速を走って帰ってきました。(いしばし・まりこ)

参考文献

『女性と戸籍』 榎原富士子 (明石書店) / 『結婚と家族』 福島瑞穂 (岩波新書) / 『戸籍』 佐藤文明 (現代書館) / 『結婚が変わる、家族が変わる』 榎原富士子・吉岡睦子・福島瑞穂 (日本理論社) / 『楽しくやろう夫婦別姓』 福島瑞穂・榎原富士子・福沢恵子 (明石書店) / 『(別姓)から問う(家族)』 諫山陽太郎 (勁草書房) / 『非婚を生きたい』 善積京子 (青木書店)

「暮らしと消費者金融
～家庭経済に活かすローンの知識～」
(消費者金融連絡会/無料)

問合せ先：消費者金融連絡会
TEL 0120(482)634
FAX 03(3215)7249

連絡先：名古屋市東区筒井1-14-35
(〒461-0003)

ファックス：052-936-2843
メールアドレス：satoko@tcp-ip.ne.jp
情報をお寄せ下さい。特に「高齢者」
「家庭経済」に関する教材（本・ビデオ）
の情報をお待ちしています！



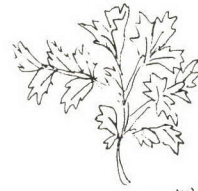
去年の秋に、勤務校内で財布・現金の盗難が相次ぎ、私も被害に遭いました。また、校則でアルバイトは禁止となっていますが、大多数の生徒がやっており、自由になるお金をたくさん持っています。生徒達の金銭出納の状況をアンケートなどで知ると、お金を得ることや、物を買うことに対して無頓着ではないかと思いました。そしてまた、金融業界、大企業の破綻など、経済の話題に事欠かなかったこともあり、教員3年目にして初めて（これは問題発言？）、家庭経済の分野に取り組みました。ほとんど知識がなかったので、いろいろな本に頼りました。今回と次回はそれらの本を紹介します。

「暮らしと消費者金融 ～家庭経済に活かすローンの知識～」

これはA4サイズの薄い冊子です。これは、消費者金融連絡会に連絡をすれば、無料で送付してもらえます。この冊子は、家庭科での資料を想定して作られています。「家計」を考える、金融会社のいろいろ、日常生活とクレジット、消費者金融ってな

んだろう、知っておきたいこと（クレジットの注意など）の5項目に分かれています。それぞれ、高校生の健太君、桃子さんを中心とした会話から始まり、内容についての説明が書かれています。

私が主に授業で利用したのは、消費者金融、自己破産についての2点です。この2点については、教科書にほとんど説明がないので、この冊子をほとんどそのまま説明に使いました。消費者金融では、借入れ申し込みから契約について、自動契約機について、金利についてを説明しました。自己破産については、自己破産のデメリットという項目を主に説明しました。この冊子のままの文章で説明すると、どうしても難しくなるので、かなり噛み砕いて説明をしました。健太君と、桃子さんの会話文を使って授業を進めたり、最後に「ワークシート」というまとめの簡単なテストもあるので、そのあたりを使ってみてもいいかもしれません。



ヨモギ



タンポポ

野草の生命力と 春の香りを食卓に

もう四十年前も前の話。私は播州平野の北にある昼間定時制高校に単身赴任していた。三月はじめ、日当たりのよい丘の斜面を歩くと枯れ草のムンムンする陽のにおいにむせ、春の息吹が体の中を走った。遠くの木々の芽は淡いパープルにかすんで、私のとつても好きな季節であった。当時〃染〃にはまっていた私は、この早春のパープルをいつかは染めたいと思いつながら野草

を摘んで歩いた。

今日は染の話ではない。食べものの話である。野草の生命力をいただくというちょっとゼイタクな話。この季節を逃さないことが肝心。タンポポもよもぎも四月ともなれば旬の終わり。あのタンポポの地面に密着して寒さに耐えている深いギザギザの葉っぱ―通常仏の座といわれるロゼット植物は、風邪の予防になるビタミン類、悪性貧血によいといわれる葉酸、出血を止めるビタミンK、それにミネラルも多い。

フランスでは、タンポポのサラダは恋人にしか食べさせないと聞いたことがある。さあ！春の料理は苦みを盛れ々といわれてもという方も、野草料理に挑戦してみませんか。おすすめは、タンポポのサラダとよもぎのてんぷらです。油を上手に使うと苦みを消すから不思議。春にわが家を訪れるお客様には定番のメニューです。

〈タンポポサラダ〉

①葉っぱに軽く塩をふりかけ皿に盛る。

②細かく切ったベーコンをカリカリに炒めて油ごとドレッシング代わりにかけていただく

③ベーコンの代わりにいりたまごをかけてもよい。タンポポより油が先に舌につくようにしておくこと。

〈よもぎの天ぷら〉

①よもぎもギザミの深い葉っぱ。摘んだ葉先を洗って、ややうすめに天ぷら粉をといた衣をつけて揚げる。樹水のように繊細でシャリッと感触がよい。

②残った衣には、ありあわせのさつまいも、にんじん、玉ねぎなどの千切りに小魚（白す干し、干えび、いりこなど）をまぜてかき揚げにする。

最近、過剰な栄養物が血液中に停滞すると血液が粘ってくるというので、血液をきれいにして流れをよくする浄血剤としての栄養補助食品の宣伝もよく目にする。ハウス野菜にだけたよらず、自然の生理を体の中にとりこみませんか。（いりえ・かずこ）

女

が歳をとるといふこと

木村 栄

近頃都で流行るもの、若い女性の電車内化粧と飲食。

凄いのをみた。都心へ向かう私鉄の隅の座席に腰を下ろすとすぐさま化粧ポーチを取りだし、まずは前髪をクリップで留める。化粧水を叩き下地クリームを塗った上にファンデーションを伸ばす。眉を描き、アイシャドウをぼかし、口紅を引く。クリップを外して携帯ブラシで前髪を整え、メイキャップの出来栄えを手鏡で点検し、パチンと閉じてバッグにしまい、ひと揺れして立ち上がった所が終点だった。お見事、という

ほかはない。

数日後、別の光景をみた。バッグと紙袋を下げて、空席の真中に座った女性。悠然と紅茶のパックをとりだしてストローをセットし、次に丸い大きなパンを出すと半分ほど包装を剥いて大きくパクリと一口、紅茶をひと飲み。

両手にパンと紅茶を持ち、悠々と車内の中吊り広告などを眺めながら咀嚼し、パクリと一口、ゴクリとひと飲みを繰り返す。その内ちらちらと気にする私の視線をとらえてきつちりと見返してきた。パクリ、ゴクリ、もぐもぐとやりながら私が目をそらすまで見返している。目の色は攻撃的でも挑戦的でもなく、何の表情も読み取れない。

食べおえて片付けると、立ち上がって降りていった。これ又、鮮やかなお手並みである。

両者ともギャラリーの視線を気に

する様子はさらさらなく、善し悪しの論議にも全く関心がないようだった。

人に迷惑をかけることなく、朝ギリギリまで寝て、でも朝食を摂り、きちんと化粧をして出勤準備を整える。時間の有効活用ではないか。周囲もやがて慣れ、飽き、関心を払わなくなるだろう。その、どこがどう悪いのか。

援助交際は別格としても、人の中でキス抱擁に至るまで、何故悪いのかと聞かれてしかとは答えられないことが増えた。苔のはえた公衆道徳まで持ち出して色々言つてはみるけれど、だから何なの？ と問い詰められると、ラッキョウの皮を剥くように芯がなくなってしまう。この国の若い世代が、自分と他者の目とが気持ちよく折り合えるマナーを創出してくれるのを待つ他はないのだろうか。(きむら・さかえ/ライター)

いやあ、まいった。うれしくてしようがない。二十代の初めにフェミニズムと出会った頃以来の鮮烈な衝撃だった。目からウロコなんてもんじゃない。身体中の角質が剥げ落ちて、みずみずしいお肌と心になった(ような気がする)。難しいフェミニ本もたまに頑張つて読むけど、フェミニズムの困難だの、ポスト・フェミニズムだのと言われると、いったいどうすりゃいいの? って感じ。

ところが二十八歳の著者は、「私にとってフェミニズムというのは、『らしさ』からどれだけ解放されるか、の一点にしろられる」と明快に言う。なあんだ、それだったら私にもできるぞ。

私自身も含めて、元気のいい女は大抵どこかでジェンダーの壁にぶつかっている。著者も例外ではない。

●本をめぐる超! 気まぐれなりけーえっせい●第10回
『はちみつバイブレーション』
北原みのり 河出書房新社 二二〇〇円

痴漢にもセクハラにも遭っているし、仕事上ではそれこそ山ほど「男の『上げ底』シークレットブーツ」を履きたいことがあつたと思う。それなのにこの本には、私が慣れ親しんだウラムツラミの匂いが全然しないのだ。恨んでる暇があつたら、「女たちが『女』をもっと尊敬することがで

きる」社会を創るためにはどうしたらいいかを考えちゃう人なのだ。

「女友達が、いちばん、大切」と言いつけてくれるのもうれしい。男社会でヘコまずに、したたかに生きるには、女同士のネットワークほど心強いものはない。私自身、夫がいなくても生きていけるけど、女友達が一人もいなくなったら生きていけ

ないかもしれない、とマジで思う。この女友達とのセクシユアルトークがまた、超イケてる! オーガズムには四種類ある? えっ、私は一種類しか知らないよお、なんてついつい一緒に話してる気分。

著者はセクシユアルグッズの販売も手がけている。女性用バイブレーターを創つたきっかけを

菅井純子

始め、女性の性器、性欲、セックス、マスターベーションを真正面から語つた各章は、男と女の間の暗くて深い溝を埋めるのにもきつと有効だ。

それにしても「田嶋陽子が吉永小百合だったら……」という見出しには笑った。そんなこと言っちゃっていいんだろうかと心配したら、本の帯に田嶋センセイが素晴らしく美しい賛辞を寄せておられた。

(すがい・じゅんこノ教師)

雪と孔雀

——「フェリーニのアマルコルド」について——

「フェリーニのアマルコルド」を見終えてカーテンをあけたら雪が降っている。まるで魔法にかけられたようだ、夢でも見ているのではなからうか。冬枯れた多摩川の河原を鹿の子まだらに染めて降る雪を眺めながら呆然となった。

「アマルコルド」を見るつもりではなかったのだ。見た当初はそれほど思わなかったビリー・ボブ・ソーントンの「スリング・ブレイド」が時のたつにつれて意外に深くこちらの心に食いこんでしまっているらしいことに気づき、その思いがけない滲透力の性質をなんとか文章の網目に掬いあげたいものだとねばっているうちにニツチもサツチもいかなくなり、もはやこうなったら仕方がない、中断して「アマルコルド」でも見るかとビデオをセットして部屋のカーテンを引いたのが午後の二時。雪の気配なんてケラもなく薄日さえさしていたのに、思いがけず映画にひきこまれてしまった二時間のあいだに雪が、いつのまにか降っていたのだ。

「雪が降ってるぞ！」

五二歳のフェリーニが、北イタリアの港町リミニですごした少年時代の思い出をポブラの綿毛が風に舞う春の初めから夏、秋、冬、そして再びめぐりくる春へと四季折々の風物の甘やかな描写とともに語った映画「アマルコルド」の終幕近く、猛獣の咆哮も聞こえるからターザン映画でも見ていたのだろう、タムタムタムとスクリーンから響く太鼓の音にあわせて身体をゆすっていた少年たちが外からの声に誘われておもてに出てみると、ああ、たしかに雪が降っている。

「ぐたばれ、先公せんこう！」「この調子なら休校かもな」「山が真白だ」「海岸に行ってみようぜ」

少年たちは叫ぶ。

「なあに、牡丹雪だ。積もりはしない」

男がひとり、落ちてくる雪のひとひらを掬ってしたり顔に言うが、雪はその後も四日五日と降りつづき記録的な大

雪となる。

「凄い！」

主人公の少年テイトはようやく回復しはじめた病気の床から抜け出して窓をあけ、降る雪をみつめる。病氣といつたってそれほど殊勝なものではない。十五歳のテイトは数日前、煙草屋のかみさんの豊満な肉体に魅せられて閉店間際の店に忍びこみ、ほくだつて一人前のオトコだぞとかみさんの巨体をよるめきながら二度三度と抱えあげはしたものの、「まあ、この子つたら！ 変わった子だねえ」と巨大なおっぱいの谷間に顔を押しつけられ、「吸うんだよ、坊や。吹くんじゃないよ」と叱咤されて一生懸命にハゲンだにもかかわらず窒息寸前のへろへろ、「この役立たずが！」と追い返されて高熱を発し、ついに母の看病、医者

の診察をおおく滑稽を演じたばかりなのだ。

（この身の内に兆したやけに切なくてやけに熱いものの正体は何なのだろう）

少年はほてった身体を窓によせ、降る雪に眺め入る――。

つづく場面では、思春期の息子をやさしく看病した母親が入院し、病室の窓から雪を眺めている。

（ああ、こんなに痩せてしまった）

白い病衣を着て娘にもどつたような母親は指環が回るほどになった自分の指をみつめ、それから見舞いにおとずれ

た息子の手をとり、「お父さんは仕事で疲れているのだから、いい子にしていなくてほだめよ」とさすとす――。

「案外お前は運がいいよ。こんな天気の時はずっとベッドに寝ているにかぎる」

いつもは怒鳴つてばかりいる妻にむかつてテイトの父親はやさしく慰めの言葉をかけ、病室の窓から下を眺めては、「内庭があるなんて知らなかった。白い花園のようだ」といつもに似ない言葉をつぶやく――。

このように雪は、見なれた町の景観を一変させて人々に新鮮な喜びをもたらすだけでなく、日常に狎れたひとの心に非日常の妖しい感触をもたらし、変容の時、死と再生の時が迫りつつあることを静かに告知するのだが、テイトも母親も父親も降る雪をみつめながら時の迫りつつあることを予感するだけで、何がおこるのかをまだほんとうにはわかっていない。純白の雪を前に、彼らはなすすべもなくしびれたようになって来るべき時の来るのを待っているだけだ。

性にめざめたテイトの目の先を、グラディスカ（どうぞお受け下さい）という意味深長なあだ名をもつ年上の美しい女が女神のように悠々と行く。赤のベレー帽、赤のスーツ、赤のハイヒール、そして黒い毛皮の襟巻。雪に映えるその美しさに夢中になったテイトはグラディスカのあとを

追うが、うず高くつもった雪が壁となって迷路と化した町の通りで姿を見失う。

ある日はまた、雪と見まごうような純白の服に身をつつんだグラデイスカ、街の男たちや少年たちの憧れのまどであるグラデイスカが、真紅のセーターで髪をおおって雪の中に姿を現す。

「ああ、グラデイスカだ！」

「グラデイスカが標的だ！」

興奮した少年たちの投げる雪の玉が白いスカートをはいた豊かなおしりに碎け、「やったわね！」と女は花やかに笑いながら雪の玉を投げかえす。

「グラデイスカに当てるな！」

男が止めに入ろうとする。その顔に、グラデイスカが振り向きざま投げた雪が碎け、笑いをはじける。

「やめて、もう降参！」

「逃げるなよ、グラデイスカ！」

なおも追う少年たちに店の主人が腕を振り回して叫ぶ。

「ガラスを割ったら承知しないぞ！」

このように大雪は小さな港町に祝祭的気分をまずはもたらしたわけだが、もちろんそれだけにとどまりはしない。雪を送ったものは、さらにその先、なすべきことをなさずにはすまないのだ。

「あれは何だ？」

少年のひとりが見上げる空の高みから、雪とともに不思議な啼き声が降りてくる。広場の人々は皆空を仰ぎ、店に逃げこんだグラデイスカも再び戸口に姿をあらわして、舞い降りてくるものをみつめる。

「ああ、伯爵のところの孔雀だ」「捕まえるか」「こっちへ来い」

氷りついた噴水の上に降り立った孔雀は、囁き合う人々の見守るその前で、ゆっくりと羽根を広げる。その瞬間、降りしきる雪の紗幕の向うに美しい緑の羽根を広げた孔雀は、まるで他界からこの世界につかわされた使者——この世ならぬ美しいものの棲む世界の存在を人々に告げ知らせるためにつかわされた神祕の使者であるかのように、その神々しいばかりの美しさによってあたりの空気を氷りつかせ、見守る人々に言葉を失わしめるのだ。あたかもかくや姫を迎えにきた天の使いの者たちが姫を行かせまいとする地の人々すべての心を萎えたようにさせた、そのように。

もちろん、雪の中に緑の羽根をゆっくりとひらく孔雀の怖いような美しさを目にしてしまった少年は、それとひきかえに、その直後に、やさしかった母の死という代償を支払わされることになる。あたかも、「水仙月の四日だもの、子どものひとりやふたり、とったっていいんだよ」と

雪童子ゆきわらわすにむかつて叫んだ雪婆ゆきばんこのように、アドリア海に面した北イタリアの小さな港町に大雪をもたらしたものは、母親としての役目を終えようとしていた女をひとり、少年かとりあげたのだ。なすべきことを、雪は成就したのだ。

母親の葬式のあと、少年は悲しみに沈む家を抜け出てひとり突堤に立ち、海を眺める。と、その時、少年は、風に乗って漂い流れてくる白いもの、ポプラの綿毛を手をひるがえし、空中に掬いとる。冬が去り春が再びめぐってきたのだ。そのことを知らせる最初のしるしが、町のだれよりも先に、母を喪った少年のもとにもたらされたのだ。

「アマルコルド」のラストは、綿毛のいっばいに飛ぶ野原でおこなわれる結婚パーティ。憲兵マテオという案外な男と結婚したグラディスカをそれでも祝って町の人々が歌い踊り、少年たちは整列して「グラディスカ、今までいたずらしてごめんさい。でもぼくたちは貴女が行ってしまったのがさびしいのだ」と惜別の言葉を送り、やがてパーティは果てる。

「海へ行ってみよう」

少年のひとりが綿毛を追いかけてながら叫ぶ。

「ティトはもう帰ったのかな」

これが映画「アマルコルド」の最後のセリフ。そうだ、少年たちの群れの中にいつもいたティトは、もうここには

いない。彼は群れをはなれ、やがて故郷リミニをあとに退廃の都ローマへと赴き彷徨することになるだろう――。

「アマルコルド」をうっとりで見終えたぼくは、まだ夢からさめきれない目をそのままに部屋のカートンをあけ、そのとたんに、ペランダ越しに見渡す空間いっばいに降りしきる白いものに不意打ちされたわけだから、うつけたように降りしきる雪に目をやりながら、その雪の紗幕の向こうに孔雀の緑の羽根がゆつくりとひらくさまを、マガリ・ノエルの白い豊かな胸もとを、それをおおって風になびいた真紅の色を幻のように見てしまったのは、どうも仕方ないことだった。

目の前に降る雪と、フェリーニの映画の中に降った雪と。枯葉色の多摩川の河原や対岸の丘に降る雪と、孔雀の緑の羽根や女の赤いセーターに降りかかった雪と。

その二重の像を、その錯視を、しばらくはほいままにたのしむことを自分にゆるしながら、やがてさめていく意識の中でぼくは、ビリー・ボブ・ソーントンの「スリング・ブレイド」が、そのように人を夢幻へと誘う甘美な映像をきびしくしりぞけたところに成った、そうした性質の映画であったことに思いたったのだ。

(たけだ・ひでお／霞塾主宰)

宮台真司の世紀末講座

第七回―意味から強度へ

まとめ・編集部

こんにちは、宮台です。いただいた質問に答えながらお話ししたいと思います。

Q ある人が良きこととと思っていることを他の人も良きこととと思っているわけではないということ、会社の中でもあてはめていいものか。例えば上司が「みんなでがんばれば売り上げ上がるから頑張つて仕事をしよう」と言うんですが、それが違うんではないかと思っ

ていて。
宮台 「自己決定しろ」と言っている人間に対して「どうしたらできますか」と聞くのはともと逆説だし、あるいは「自己決定しろ」と言う人間の話をこのように皆さんが聞いているのも妙

な話なんです。そういうことを自覚していらないようなのでその上で申し上げますが、実際に会社の多くで起こっていることは「動機づけの強度」に失敗するということです。つまり今

ダウントレンドですよ。がんばつてもシェアの維持あるいは微減にとどめることが精一杯で成長はありえない。つまり日本的な日本企業はしばらくのあいだ芽がないわけです。したがってかつてのように、自分ががんばれば、会社も家族も地域もそして社会全体もよくなるという夢物語はありえなくなつた。そうすると何のために働くのか、学生の中でも「何のために勉強するのか」「何のために就職しようとしているのか」ということについて全般的な

前提崩壊、アノミーが今起こっています。ではどうすればいいのか。今『ダ・ヴィンチ』の「世紀末相談」という枠で「意味から強度へ」というテーマでしばらく連載させてもらっていますが、かつてのようには上昇するとか、誰かのためとか、会社のためとか、それはもはや生きる支えやものさしにはなり得ません。

「意味」から「強度」へ。強度というのはインテンシティの訳で、密度とか濃密さということです。「意味がなくても濃密に生きることではできない」という、人間社会の伝統的な生き方が、実は今また重要になってきているといえます。例えば、「このラーメンはおいしい」というのは意味とは関係あり

ません。レシビを見てはじめて「うわあ、うまい」というのは最近のワインブームにはありそうですが、バカですよ。踊って楽しいのも意味とは関係ありません。セックスが気持ちいいのも意味とは関係ありません。セックスと意味を結びつけようとしたのは、いろんなフェミニニストの方がおっしゃるように近代国家の陰謀であつたと言つてもいいくらいのことです。家父長制度の陰謀であると上野千鶴子先生ならおっしゃるところでありましょう。

つまり、いかなる意味、正しさとも関係なしに「濃密な」時間を生きたことができません。逆に、意味があると言われていることをやってもその意味が万人には共有されず、そして意味そのものが濃密さを失っていることもありえます。したがって意味があるということをやつて充実した強度のある人生を送ることができるとは限りません。何

があなたにとつての強度になるのかということは僕はわかりませんが、個人的な試行錯誤の中から見つけ出すしかなく、何がおもしろいというのが人によつて異なるのと同じように、人によつて何を濃密さ、強度と感ずるかは違つていうことです。実は学校教育の試行錯誤のプロセスの中で、何をしているときに、どういう人間といふときに、あるいはどういう種類のコミュニケーションをしているときに自分が楽しいのか、充実するのかということ、自分で見極めてもらうということがあります。そんなわけで抽象的ですが、一応お答えとさせて下さい。

Q 僕は大学の4年生なんです、今まで自分のやってきたことがまちがっていた気が今すぐくしていて、結局一応大学は卒業するんですが、その後のことは全く考えていないんです。98年8月号の『ダ・ヴィンチ』を読んだの

ですが、意味を求めて生きていきたいし、強度に生きることは自分にはできないと思うんですが、宮台先生が今やつていふことは意味を求めてやつていふんじゃないんですか。

宮台 はい、鋭い質問だと思います。実はですね、意味と強度というのは厳密に言うると対立概念ではありません。意味がなくても強度のある人生というのを、僕は送ることができません。だんだんできるようになつてきた気はするんですが、むずかしいことです。上昇することであるとか、競争することであるとか、意味のあることをすることだとか、小さい頃から意味づけられてきた期間が長かつたからだと思えますが、そのことを僕は自覚しています。そうすると問題は急に反転します。例えば仮に僕は意味的な達成を求めて仕事をしているとしましょう。「宮台は失敗するだろう」と中森明夫さんが予言しておられますが、私もそのような

予感がします。すると不幸になりますね。しかし何もないより、いろいろやっつてどん底に落ちるといってそれ自身が濃密な体験であります。これはよく失恋を恐れて何もしないやつに昔から言われる処方箋であります。何かもしない人生は平穩無事で安全であろうが……。

Q 宮台先生の本を読んで非常に共感されて自殺した人がいらつしゃるといふことで、そういう意味から強度へという頭のスイッチの、考え方の切り替えができない人間が成熟社会では出てくると思うんですが、そういったアノミー自殺というのは成熟社会の必然なんでしょうか。

宮台 まず、アノミー自殺というのは、デュルケムという近代社会学の父の一人が百年前に『自殺論』という本で自殺の原因を分析したときに出てきたものですが、アノミー自殺は現に増え

てますよね。典型的にいうならば、日本の自殺者の急増を支えているのは中高年者の自殺です。つまり居場所や所属を失うという失業園自殺ということに尽きると思いますが、今まで自分が意味があると思つてやってきたことの意味の梯子をはずされるといふことによる自殺ですからアノミー自殺だと思えます。僕の知つている範囲でも、確かに僕の本の愛読者、それもかなり熱烈な愛読者が自殺をしています。確かにそれはアノミー自殺だと思えます。

で、質問に対する答は「アノミー自殺だと思ふ」ということではないんですが、僕自身の態度ですけれども、確かに過渡期には一定程度避けられないと言ふことができます。しかしながら僕自身が今やつているプログラムは、自分の手元に濃密さに役立つリソースがあつても思ひこみによつてそのことに気が付かないということが実はたくさ

んあり、その思いこみを相対化によつて解除するといふ試みをしているといふふうにお考え下さい。

Q 宮台さんはいろんな論説を述べておられますが、相手は聞く耳を持たない、あるいは通らないと言つたなかで、そういうプレッシャーにもめげずに発言できるその強さといふのはどこにあるのでしょうか。

宮台 プレッシャーに負けぬ秘訣。私はなぜかプレッシャーをあまり感じません。人に批判されてもぜんぜん平気です。周りが見えろいつも焦つているので、それを見て僕もやや焦る。そういえば四年前の『噂の真相』に「都立大助教授M、テレクラ取材と称して女子高生とやりまくり」という柱ゴシップが出ました。これは事実には反しているわけです。取材は取材、確かにテレクラにはまつていることはその当時から片鱗がありましたけど、それとこれと

は別です。でもこれが出たときに、これで僕の調査の信用性、プロージビリティ、信頼性は上がるだろうと思っ

喜んでいたら回りは違つて、大学のゼミに行つたらみんな目を合わせないんですよ、しーんとしてる。僕、柱ゴシ

ッブ出たの知らなかつたんですよ。「宮台さんほんとに知らないんですか」といつて『噂の真相』を出してきてそれが書いてあつたんです。それで「ふーん」つて。なんのシヨックもないで

す。僕はメディアに出ている宮台のことをミヤダイと言つてますが、宮台とミヤダイは全然違うものだと思つてるので、ミヤダイが何を言われても全然関係ないと思つています。

Q 世の中の流れと逆行しているようなことが新聞に出てくるというか、例えば東京都の校長の権限を増やすとか、中学生がたばこをすつて教師を蹴飛ばしたらそれで逮捕されたという報

道がありました。が、別の対策をとるべきことだと思ふんですが。

宮台 昨今、いろんな成熟社会化の流れに逆行するような、反動というかそういう動きがあることは事実です。しかしその反動としてなを取り上げるか意見が分かれると思います。例えば成熟社会化に適応しようという動きに対する反動ということかというと、少年法改正をめぐつても、性に関わる法律、条例制定をめぐつての動きというのはいくらでも反動はあります。

ただ判断が難しいのは校長権限の強化というのは何を意味しているのかということ。これが実は文部省の上からの改革の布石であると考えられます。基本的には組合の反対を押し切つてプログラムを実現するための基本的な道筋をつけておこうという目論見だと僕は推定しています。僕も校長会などでいろんな校長先生とコミュニケーションするチャンスがありますけれど

も、一般の人材分布と同じように二割はすばらしいなと思ひますが、八割、あるいはそれ以上はどうしようもないなと思ふわけです。したがつて現行の

校長人材分布を前提に校長に実権を委ねても何も変わらん、悪化するんじゃないかと思われるかもしれませんが、僕もそうだとは思ひますが、おそらく文部省の目論見は先程言つた通り。したがつてこれを目論見通りにするために校長として選ばれる人材のクオリティを上昇させるように選抜システムを変える必要があるでしょう。これは教育委員、教育委員会のありかたの改革と結びついていますが、これについてはかつて違つて文部省は教育委員会公選制の立場に急速に転換していていますので、教育委員、教育委員会公選化と校長への権限の集中というのが一体になつた、車の両輪のようになったプログラムとお考えいただく、むしろプログラム改革をめざしたものだと思ひ

られると思います。

あと、学校における警察の導入については、僕は条件付きで賛成です。それはどういうことかとというと、先生を生徒が蹴つたぐらいで警察を呼ぶというのと同じくらいに、先生が生徒をぶつたぐらいですぐに警察を呼ぶというのが必須の条件です。どちら側の暴力についてもすぐに警察を呼び出せるような状況にしてほしい。しかし現場の腰抜け教員の対応はそのような処置に耐えられませんから、実際に僕が言うように、つまり生徒の暴力に警察を導入するのと同じように教員の暴力にも導入しろというのは、できるわけではない。したがって警察の導入はできないことになり、現実的には。

Q 28歳のコンピュータプログラマーですが、お話の中で田舎の子ほどよくいじめをする、他にすることがないからというお話でしたが、僕自身田舎

の出身ですが、虫と遊んだりして、そこそこ楽しめるんじゃないかと思うんですが。それと、いじめというネガティブな形でも人と関わるのがうれしいというのは哀しい人間のさがのようなものだとお考えでしょうか。

宮台 田舎でも快適に生きられると思います。確かに僕も生き延びました。僕は郊外化というのを二重の意味で使っています。一つはニュータウンで起こっているような状況と、もう一つは日本中どこにいても風景、つまり心象風景が同じになるということです。どこに行っても塾に行く、どこに行っても進学のことを考えているという状況はかつての日本にはなかったんです。かつては郊外の団地でしか導入されていなかった価値が、田舎、津々浦々まで浸透しつつあると。そういう広い意味での郊外化の中から、たまさか逃れ得ていた場所がおそらくあったんでしょね。そういう意味では

今でも田舎で快適に生きられるかもしれません。しかしそんな場所は今では例外になりつつあると思います。したがって風景は同じように見えても、心象風景は郊外化しつつあるというのが僕の考えであります。

あと、いじめをされても人とかかわろうとするのは人間のさがかとうと、これはですね、人とかかわるのは人間のさかだとは僕は思っています。人とかかわることで自分の尊厳や濃密さを獲得しようとするか否かは、実はその人の生育歴に依存すると僕は思っています。だからなぜ学校で人として承認し、承認されるようなプログラムを実施する必要があるのかと言えば、そのようなプロセスを経て試行錯誤を積み重ねてきた人間は、大いなる可能性で自分自身の自尊心と他人の存在を結びつけるだろうと。つまりそのようなプログラムを施さなければ、人間は他人との社会的交流の外側に自尊

心や尊厳を打ち立ててしまいう状況が想定され、それは共生の原則と反するということであります。

Q 学校ストレスのお話のなかで、ホームベース制をつくることで学校にやすらげる場所をつくるということですが、それはいま家庭で家族の中にやすらげる場所がないからそういう居場所をつくるということなのか、それとも学校と家庭と別々の場所にそういうやすらげる場所とというのが必要なのでしょうか。

宮台 家族に居場所がないから学校に用意することかということですから、広い意味ではそういうふうにも、広い意味ではそういうふうにも、でもかまいません。あるいは家族に居場所のある子もいれば、居場所のない子もいる。そのようなままだら模様に対処するために、学校の中にホームベースを置くことには意味があるということです。

ただ学校にホームベースをおくというのは、実際にはラディカルな単位制高校や、福島県の一部の中学で実践されているような成功例を見ると、まず必ず自由化ということ、このホームベースをつくること、もしくは隠れ家やたまり場をつくるということは一体であるというのがわかります。これは僕が八王子にあるニュータウン化した学校で働いている経験からも明らかであります。78年以降有名大学が八王子に移転した結果、軒並みキャンパスは薄くなってしまいました。それは学校の内外にたまり場がないことからきています。つまり外には学生街がなく、大学内には昔は汚かったゴキブリがいずり回っていた学生会館がない。たまり場がなければ人は授業が終わるとあつという間に散り散りに帰ってしまいます。いつまでたつてもよそ行き顔。コミュニケーションの濃密さは訪れません。まあ、大学レベルでも同じよう

なことは経験的に確かめられています。

つまり滞留できる場所をつくらないうとどうしようもありません。かつて学生運動対策という名目で、学生が滞留できるような広い場所をできるだけ減らす、ちょうど新宿西口広場が通路になったように、広場を通路に変えていくという考え方で設計をしました。オープンスペースを増やすというのもそういうことで、滞留できないようにするわけです。しかしそうすると非常に病的なことが起こります。学生相談室に相談する学生も増えるし、自殺者も増えます。筑波学園都市で自殺者が減つたのは、行政が意図的に飲屋街が集中する比較的汚い場所を作ったということが大きなきっかけになっています。汚い、そしてそこに行けば人目を逃れられるような、同病相哀れむ場所。こういうような場所が人間には必要なのようです。

(みやだい・しんじ 東京都立大学助教)

セックスをめぐる
超！わがままな
りれーえっせい

第①回

セックスワークと三つの自立

●中条きよし

そして私はごく日常的に買春をして
いる。私が買春をする積極的な理由に
ついては別の機会に譲るとして、消極
的な理由、というか前提は、現代の日
本において売春は強制労働ではないの
だし、私の買春は性暴力ではない（相
手のいやがることはしない）わけで、
世間体は悪いが悪いこととは思わな
い、それだけのことだ。

とは言え、こういうところでこうい
うことをいうこと自体、まったくの能
天気を買売春を肯定しているわけでは
ない証拠なわけで、買売春、あるいは
挿入を伴わない性産業全般を「セック
ス・ワーク」と言い切ってしまうには、
まだまだ課題が多く、その課題とは三

つの自立なのではないだろうか。

第一の自立は、女性の経済的自立で
ある。本人に責任のないやむにやまれ
ぬ経済的事情から性産業に従事する女
性は一部だし、一部の事情持ちのため
に性産業全般を否定するのは、親の病
気のためミュージシャンへの夢をあき
らめ髪を切り飛脚トラックに乗り三年
になる私の友人Y君のために運送業全
般を否定するに等しい暴論なわけで、
私の言っているのは専業主婦のこと
だ。

家事労働とセックスを売る専業主婦
が存在するかぎり、セックスは経済行
為であり、買売春と結婚の違いは、そ
の場で支払うか、月末に口座に振り込

まれるかの違いではない。また、事
実上破綻している結婚が性産業により
かろうじて維持されているケースも多
い。嫁とはセックスレス。不倫で家庭
を壊す勇氣もない。男の性欲どこへ行
く。ソープへ行き、口止め料としてフ
ロントに入浴料を、あと腐れとうしろ
めたさの解毒剤として部屋で女の子に
サービス料を支払うのだ。

結婚制度の大幅な見直しが必要だ。
結婚とセックスを切り離し、互いに共
同生活のパートナーとして認めあえる
ならば、相手がどこで誰とセックスし
ようと問題にしない。あるいは逆に、
結婚以外のセックスを一切認めず、セ
ックスを含めた信頼関係が築けなくな

つたらあつまり別れる。どちらの選択肢も、女性の経済的自立が前提となる。専業主婦が「共同生活のパートナー」と言ったところで説得力がないし、先立つものがなければ離婚もできない。

私はフェミニズムにはあまり興味が無いが、結果的に買春の単価が下がるだろうから、女性の社会進出と結婚制度の見直しに賛成である。

第二の自立は、女性の性的自立だ。アメリカでは、ベティ・ドドソンが「ボディセックス・ワークシヨップ」なるオナニー教室を開いているらしいが、自分で自分を欲ばせることを知り、男性に教えられるのではなく、自らの手で性欲を獲得すること。これは二つの意味で買売春を無意味にするだろう。一つ。女性が受け身であることから解放されるため、受け身であるはずの女性が積極的サービスを行う落差を売りにする性産業が廃れる。一つ。女性が性を自発的に楽しむことが一般化

すれば、一部の性的弱者をのぞいて、男が女に金を払う理由がなくなってしまう（まあ既に、女が男を買った話も珍しくもなんともなくなってきたが。ようこそ）。

性体験に乏しい女性が「好きな相手とのセックスでしか感じない」と言うのは、充実したマスターベーションを知らずに、好きな相手とのセックスで始めて快楽を覚え、それが刷り込まれており、刷り込みを書き換えるようなセックスをしたことがないだけではないのか（逆に、性体験の豊富な女性がそう言うのは、単に、セックスの下手な男は相手にしない！好きにならないの意）。

第三の自立は、性欲の自立である。私を買春するのは偏にセックスしたいからであり、女性を支配したいからでも、承認を得たいからでも（むしろホメてばかりいる、癒されたいからでもない。しかし世間では、買春をしたり

援助交際や主婦売春をしたりするような「過剰な」性欲は、なにか他の欲望や感情や欠如が形を変えたものである、といった言説が目立つ。

まず指摘しておきたいのが、われわれが日常行うほとんどの活動は、「他の欲望や感情が形を変えたもの」であるということだ。たとえば、コーヒーを飲むビジネスマンを見て、「コーヒー欲の解消と言うよりは、『疲れた』といった気持ちやなんとかしたいがゆえの『コーヒー欲』だと思われる」など。これが冗談にしか聞こえないのは、コーヒーを飲むことが問題行動とされていないからであり、コーヒーが非法であれば冗談には聞こえないだろう。買売春をさせる「性欲」が「すり替え」とされるのは、買売春が問題行動であるという認識が先にあり、問題行動である以上、自然な欲求に基づく行動であっては困るのであり、すり替えられた欲望でなければならぬ。あ

らかじめ結論は決まっているのだ。

ある欲望が他の欲望や感情のすり替えであるとして、その優先順位を決める権利は誰にあるのか。強姦者は性欲でなく権力欲に動かされていると言うが、その屈折した権力欲は思春期の満たされない性欲が形を変えたものかもしれない、どちらがより根源的な欲求かは誰にも決められないし、口の上しい奴が勝つ。ひとつ言えるのは、「無意識の」感情を決める権利は、言葉の定義からして本人にはないということである。全く理不尽な話だ。

〈性欲⇨すり替え〉論は、ある種のセックスを問題視する人間が、ある種のセックスをする他人の「無意識の」感情を勝手に読み込み、「本当の」感情に向き合えと言う、マッチポンプ的主張であり、「いんらん」「獣」「イケてない」など、遠回しに、猫撫で声で、真綿で首を絞めるように言っているに過ぎない。セックス・ワーカーや買春者

を、蔑視するな、同情せよ、と言ってに過ぎない。大きなお世話だ、気色悪い。性欲を何か他の感情や欲望のすり替えと見なすことは、結局のところ論者の優位と認めるセックス(多くの場合「信頼関係にある一人の愛する人と、性器の接触に限定されずにおこなうセックス」)の優位性の主張にほかないのだ。

話のついでに言うが、鈴木水南子が、男性客がよく「人肌が恋しくて女を買ってしまつ」と言うことから、『性欲』はまた、スキンシップの欲求が姿を変えたものと考えられる」と論じているが、これは誤解である。精液が溜まる」とほとんどの男はオナニーをするが、男のオナニーのほとんどは性器への単調な刺激の繰り返しであり、性器は満足するが皮膚は満足せず、虚しさが残るのであり、「人肌が恋しく」なるのだ。性欲があり、オナニーをして初めて、スキンシップの欲求が生じる。性

欲がスキンシップ欲のすり替えだというの、それこそすり替えである。

私は、性欲を、セックスをしたい欲望を、他のいかなる欲望からも自立した欲望として取り扱うことを要求する。性欲が他の欲望のすり替えとして語られるかぎり、買春春に対する蔑視、同情視、異端視はなくならないであろうから。

(なかじょう・きよしこの文章の筆者。「必殺!三味線屋・勇次」が松竹系にて好評ロングランの中条きよしとは別人だが、日曜日には庭の芝刈り、風呂上がりにバスローブ(紫)に革靴でブランデー、など、共通点も多い。)

mail: nakajo@curio-city.com

〈主な参考・引用文献〉

上野千鶴子『発情装置』、筑摩書房
松沢呉一『風俗パンザイ』、創出版
M・メイシー『彼女のお仕事』、原書房
鈴木水南子『豊かな性』を採る前に、
『We』98年9月号

大曼蛇羅

図鑑

連載●第1回●葛森樹

ジェンダーフリーという流行りの言葉をなんと直訳するのかわかりませんが、とりあえずここにちわ。お変わりございませんか？

ジェンダーからの自由、ジェンダーからの解放。社会や自分の心にも巢食う、男らしさ女らしさの縛りから個人が自由な「状態のこと」がジェンダーフリー。わたしはそうとらえていますが、どうでしょうか。

またその一方で、ジェンダーセンシティブという言葉もあります。性差別や性の縛りの不自由に対して敏感に「気がつくこと」という感じなのですが、気がつくことは大切なのですが、それが個人のルサンチマンと重なってしまつと、批判的なマナザシで「自由じゃないところに気がつく」ばかりで、結果的に他人の足をひっぱることもまた多くながちです。

このあいだ、行きつけの美容室でロングの髪を脱色しマネキンのナイロンの髪のような人工的な感じにしてみました。来月はさらに脱色してから色を入れ、スパンコールのドレスが似合う「夜の銀狐色にする！」と言われていきます。念願のフェロモン直噴女になるのですから、

これは精進しなければいけません。

そこで嫌味な問題です。「あなたはこんなわたしをどう思いますか？」

「女を売り物にして自らを性の対象に貶めるなんて」「それを女と思っているなんて不愉快だ！」と言う人は、ジェンダーセンシティブの視点にルサンチマンを上乗せして見ている人です。

「あ、そうなの」と軽く言える人はジェンダーフリーの視点で生きてる人です。

ジェンダーフリーは、個人がすべてのことにわたって自分らしくある状態のこと。生物学的性差で固定される社会的役割や規範の是正だけではなく、性で規定された物事全部についてどのように選び直して生きても構わない、あなたがそれが幸せならば、それを愛していればよいものなのです。

「自由」とひとこと言ったとたん「性の秩序からの自由」そのものも問わずにはいられません。人が性をめぐることを理由に差別されない状態は、個人の人権そのもの。わたしとしては、これは革命に近いと思うのですが、どうでしょうか？

(つたもり・たつる／作家)

●連載●第11回

批判されても生きられる 河村ふみ

前回は、自分に対して「失敗する権利」を認められるようになること、人から批判されることが怖くなるということを書きました。

もうひとつ、人の批判に弱い人、批判されると深く傷ついてしまう人は、どうも、誰からも好かれたい、愛されたいと思う気持ちが強い人ではないかと思えます。誰だつて嫌われるより好かれたいですから、それはいいのですが、この気持ちが過剰だと人の批判がいたく堪えます。過剰というのは、例えば、10人いたら10人全部の人に好かれなくて嫌だと思っっているような人です。でも、ちょっと客観的に考えてみれば、これは無理な注文だということがわかります。広い世間にはどうも相性の合わない人、虫の好かない人というのが何人かはいるものです。価値観の違う人もまたしかり。

だとしたら、逆に自分が誰かからそういうふうに見られたところで何の不思議もない。それは致し方

ないことです。

『論理療法』というのを提唱したアルバート・エリスという人は、こういった思い込みを不合理／現実的でない考え方（思い込み）だとして、直接その考え方に働きかけ、考え方そのものを変えていく（説得していく）ことを心理療法としました。98年7月号でとりあげた、「うまく話さなければいけない」とか、「言い返されたら反論できない」なども、現実的でない思い込みであるわけです。

AIの技法は、この『論理療法』の考え方と実際にやってみて自分を変えていく『行動療法』とに理論的には依拠しています。

さて、エリスは「誰からも好かれなくてはならない」という思い込みの奥には「好かれなくては（愛されなくては）人間は生きていけない」というさらなる思い込みがあるからだと言っています。そして、それも現実的でない思い込みで、実際大人である私たちは、別に愛がなくなつて生きていける、と言っています。脱線しますが、上野千鶴子氏も、「孤独でもちゃんと生きていける、孤独から人間が死ぬことはめつたにない。人間が死を選ぶのは、それより他人との葛藤からだ」（『発情装置』筑摩書房）と言

っています。

「人間は愛がなくても生きていける」と、はつきり言い切る自信は私にはないので、「人間の愛がなくとも、動物の愛とか自然の愛とかでもいいだろう」と言っておくことにします。また、「すべての人から」というのがくせ者なのであって、「誰か一人でも解ってくれる人がいれば」に変換すれば、人から批判されることにそれほど傷つかないで済むだろうと思うのですが、どうでしょうか？

それと、何といっても、人から批判されたこと即人格を否定されたことになってしまう心のありようが、もうひとつのくせ者ですね。

これについては、ひたすらあの人は私の行為について批判したのであって、私の人格を非難したんじゃないと一所懸命自分に言い聞かすしかないでしょう。そして、①自分の行為に非があったのならあっさり認めて謝る、②非がないと思うのならしっかりと反論するという実践を重ねることで、だんだん批判されてもめげない自分を作っていくことです。これが行動療法。

さて、②をもっと詳しくやってみましょう。

1. 抽象的、大雑把な批判、たとえば、

「あなたはいつもカギをかけるのを忘れる」というような批判には、

「確かに、昨日は忘れしました。それは悪かったと思っています。でも、いつもではありません」。

「あなたはだらしがない。もっとちゃんとやってくれるっ！」というような批判には、

「私のどこがだらしがないのでしょうか。どうしてほしいのですか」と、具体的に言ってもらうように聞き返す。

批判の内のどこを受け入れ、どこは受け入れないかをはっきりさせます。反論と攻撃を混同しないようにしましょう。それには事実を淡々と言うことです。

2. 主観的な批判、たとえば、

「あなたは、仕事に対して無責任だ」というような批判には、

「私は自分の仕事に対して責任を持って当たっています。先日の報告書がまだできていないのは、○さんが急病で休んでいて、必要な資料が揃わなかったためです」。

相手の批判の元となったと思われる事柄をあげて

反論すると、誤解の原因が明確になり効果的です。

3. 人格を攻撃する批判には、たとえば、

「あなたは攻撃的だ」のような批判には、

「以前は確かに攻撃的になることが多かったと思いますが、自己主張の訓練を受けてからは自分ではだいたいぶ攻撃的でなくなってきたと思っています。この間も〇〇さんに対してとても穏やかに言えましたし、あの時××さんもいらつしやいましたよね」とでも言えば、説得力のある反論になります。

さて、こんなふうに反論していくためには、何といても、自分で自分を肯定する気持ちがないとできません。それがないと、つい相手の批判を無批判に受け入れてしまうことになってしまいます。自己肯定度が高ければ、「納得できません」とか「私はそうは思いません」とか「賛成できません」とか、きっぱり、あっさり言うことができます。

③ いままでのは不当な批判とはいえ、反論することで誤解を解くことができたり、自分を守ることができるといえる批判でした。ところが、このような反論が功を奏さないことがあります。それは、相手が悪

意を持ってこちらを攻撃してくるような批判です。攻撃すること自体が目的で、言っている内容はいいがかりに過ぎないような場合です。

こういう場合は、いくら反論してもムダで、よい腹が立つてくるだけなので、一番いい対処法は、相手にしないこと、自分を不快にする相手から離れることです。

もし、ふだんは話せばわかる人なのに、その時に限ってという場合でしたら、

「いまは、興奮なさっているようですから、もう少し時間を置いてから話し合いますよ」と言っても、さつさとその場を離れます。職場だったらトイレにでも立つか、お茶を飲みに行くか、とにかくその場にいらないようにすることが大事。

夫婦喧嘩など、この対処法でかなり冷静さを取り戻すことができます。相手をあくまでも言い負かそうと、その場に居続けることは泥沼です。ちよつと以前だったら、「実家に帰らせていただきます」というのが定番でしたが、あれはたいいていまた戻ってくるでしょう。夫が迎えに行ったりして。今だったら、ホテルにでも行っちゃいますかね。私はまだホテルには行ったことはありませんが、映画や散歩、

買物に出掛けることで、気分を変えることはします。今度一度超ゴージャスなホテルにでも宿泊しておいしいものを食べて、サラ・パレツキーでも読めば……ああ、考えただけでも楽しくなってくる。でも、ひとりでいることが平気な人でないとダメかな、この方法は。ひとりで映画を観たり、食事をしたりして、結構ひとりもいいもんだという気持ちも味わって、トレーニング（行動療法）をするという気持ちもありませんね。

④相手がワルイときのもうひとつの対処法は、軽く受け流すという手を使います。これは、私は読んでいないのですが、『私はノーというとき、うしろめたさを感じる』という本の著者であるマニユエル・スミスさんが考え出した批判対処法だそうです。いわゆる利口な人は、これを自然にやっていますよね。私はこれがなかなかできませんでした。いちいち相手の批判に反論したくなってしまう。でも、これもストレスフル。自分の中の怒りに自覚的になると、いちいち反論するまでもないと思えるようになります、自分の感情をあまり害さない程度の批判には、この手が使えるまでに成長しました。

これは、相手の批判を一応認めたようで、実は認めてないという微妙な対応の仕方です。

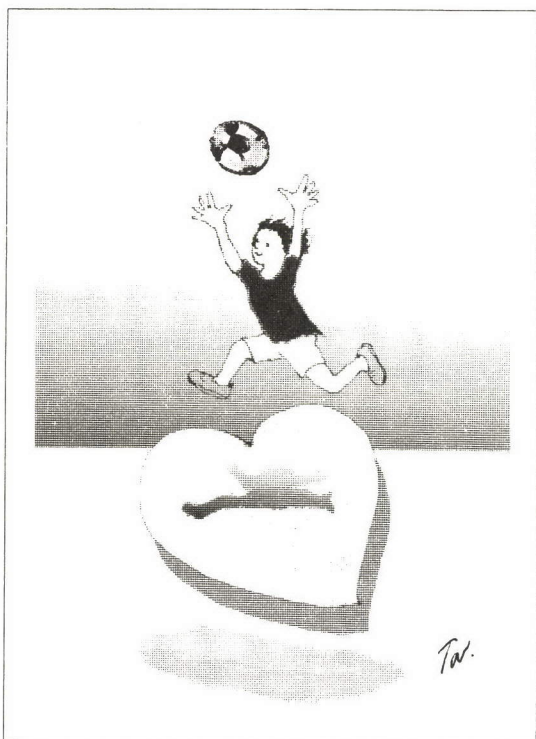
「そうかもしれないわね」と言います。その後、すぐ話題を変えちゃうのです。相手は一応認めてくれたのかなという気になります。でも、「かもしれない」だから、全面的に認めたわけではない。相手も立つし、こちらも立つという次第。

もちろん、とても納得できないようなことだったらちゃんと反論します。この場合はまあ、どうでもいいことというか、目くじらたてるほどのことはないと思える場合です。相手があまりに興奮していたりする場合はとても有効です。

相手の批判があまりにも激しく、それにどう答えていいかこちらも混乱してわからない場合もあります。そういう時は、すぐに反応しないという手を使います。

「どう言ったらいいのか、今は混乱してしまってます……少し時間をください」と言います。これは自分が感じていることをそのまま言うのですから、立派なA Tですし、何も言い返せなかったと、後で悔やんだり落ち込んだりしなくて済みます。

(かわむら・ふみ／フェミックス・カウンセラー)



終 幕 (4)

〈空き地はどこに〉

水田宗子

つい最近、テレビで相撲取りをめざす津軽の若者たちについての番組（NHK、「尾車親方の新弟子探し」）を見て、前に『フープ・ドリームス』というバスケットのプロ選手になることを夢見るアメリカの若者たちについてドキュメンタリー映画を見て、いろいろと考えさせられたことを思い出した。この二つの映像は、ともに同じテーマを通して、若者の内面をドキュメンタリーという外側からのアプローチで描いていて、そのことが強く印象に残る。

名声と富という社会的認知をすべてもたらずバスケットボールのスーパースターに憧れて、スラムの黒人の子どもたちは、小さいときから近所の空き地でボールと遊びながら育っていく。やがてその中で評判になるほどの才能を見せはじめる若者が幾人か現れてくる。『フープ・ドリームス』は、そうした若者たちの中の二人を五年

間にわたって追ったフィルムである。体格もよく、勉強もできる一人は、バスケットで有名なハイスクールにスカウトされ、一方、身体も小さく勉強もきらいなもう一人の若者は、そこには入れてもらえず、公立の普通の学校に行く。彼らは高校時代のバスケットと勉強の成績によって、次には有名大学に奨学生としてスカウトされることを目指すのである。成績もよく、有名校の強いチームでトレーニングを受け、試合を重ねた若者は、結局は挫折してバスケットをやめてしまい、もう一人の若者は成績もぎりぎりのところでようやく高校を卒業し、大学への入学資格を得て、バスケットボールへの夢をつなぐ。

スポーツ選手にはハングリー精神が必要だとはよく言われてきたことだが、この映画の若者たちも、シカゴのスラムと崩壊した家族から逃げ出し、自分自身の生活を築こうとして頑張るのだが、そのハングリーな気持ちは、何よりも尊厳ある自分になりたいという、内面の叫びのような痛切な希求に支えられている。スラムに住むこの黒人の若者にとって、尊厳ある未来の可能性はバスケットボール選手になることなのであり、それ以外に自分の夢を描く道が見えない。バスケのスーパースターになる夢と、そのための厳しい鍛練は、自己の内面を保つための、それしかない唯一の手段なのである。だから、才能ある若者の挫折は、スカウトされた白人学校での差別や、不当なトレーニングの強制など、さまざまな外的な要因があるのだが、究極的には誇り高い自分になりたいという内面の鍛練に彼が自信を失い、そのための戦いに敗れたことによる。

同じように相撲取りをめざす津軽の中学生たちにとって、相撲取りになる決心は内面的な出来事である。バスケットボール選手にもまして、相撲取りになるには早くからその道に専心し、身体を鍛え、技を身体に憶えこまずための厳しい訓練を日々しなければならぬ。そのために若者たちが棄てるもの、犠牲にするものは、遊びたい盛りの単なる時間ではないだろう。小学校以来の、部屋いっぱいのトロフィーやメダルや賞状に示される輝かしい成績と、小さな英雄という栄光の記憶を持ちながら、結局は弟子入りの決心がつかなかった若者の一人は、髪を金色に染め、眉をそり剃り、ピアスした耳にイヤリングをつけて、雪の津軽の田舎町で、家業の梅干し漬けを手伝っていた。

その若者の後輩にあたるもう一人の若者は、尾車親方に弟子入りするのだが、彼の母親は家を出ていき、父親

も祖父母の家に彼を置いたまま家を離れて新しい家族を作っている。昔、村相撲をしていたという祖父は、一人にされた幼い孫に相撲を教えることで彼を育ててきた。もし毎日彼と共に苦しい練習の日課をこなしてくれる祖父がいなかったら、彼はどんな少年になっていただろうか。

津軽の少年の家には、土俵にあたる小さな練習場があり、ほかの若者たちの近所にも中学にも土俵という空き地があった。私には、その空き地がなぜか少年たちに学校や家族や社会から自由になれる心の住処のように思えた。何から逃げ出した空き地なのかはそれぞれ異なるだろうが、その空き地は、学校での勉強からも、親のいない家庭からも、親や大人に対する感情からも逃げ出し、それらを無化する空き地のような気がした。少年たちには、そうした未来の誇り高い自分を夢想することができる場所が必要なのだ、と。

空き地といえは、最近、永井荷風の『日和下駄』を何気なくめぐっていて、荷風が江戸のみならず明治初期の面影も急速に消し去っていく二十世紀初頭の東京の変貌を嘆き、開発の土木工事によって、以前は多くあった「閑地」がどんどんなくなっていくことを語っていることに改めて共感した。バブルがはじけたあと、何も建たないままに放置されている「建設予定地」はあちらこちらに見られるが、そのどれもが、荷風がこれも好きだという雑草が生え出してくる閑地ではなくて、アスファルトで舗装された駐車場である。そこからは、雑草はおろか、未来の相撲取りもバスケットボール選手も生まれてはこない。

親や指導者の過剰な期待や、厳しすぎる訓練、また幼い頃の輝かしい成績が、かえって若者の空き地を潰してしまうことにもなるのは、有名中学や高校や大学に子どもを入学させたいと思う親を持つ子どもの場合と同じだろう。最近のオリンピックの不祥事を考えても、スポーツのスターが、富や社会的権力とは次元を異にした名声と人間的な尊厳をもたらすものであってはじめて、スポーツを目ざすことが若者たちの心の空き地となりうるのではないかという気がするのだが、そういう空き地はもう姿を消していくのだろうか。バスケットボールのスターになる夢を断念した若者や、相撲部屋に弟子入りせず、金髪になった若者に、新しい空き地が見つかるのだろうか。

神奈川 田中勢津子

風邪が猛威をふるっていますが皆様お元気ですか？ お伝えしたいことがありますまして筆をとります。

● 伝えたいことその1

かながわ国際交流協会の「多文化と出会おう」というワークシヨップで、次のようなことをしました。楽しかったです。①自分の手を紙にうつす。②それぞれの指を好きな色、模様でぬる。ただし、それぞれの指には意味がある。



小指：未来
薬指：愛情
中指：対立・かっとう
人さし指：学校・仕事
親指：子ども時代

③グループに分かれて右の作業をした後で、グループのメンバーに「自分の手」を見せて説明する。

④そのうち（五本の指）の一本をえらび、グループで1コマのシーンを体で表現する（それぞれの思いや共通の思い、何でも可）。

私たちのグループではク中指についてクをえらび、家族の心の様子を表すことに試みました。テーマは、ク自分を生きなきヤクというものでした。

父の前には父の母
背中合わせ、仕事ばかりの父
行かせまいと押さえる母
姉に続きたい妹



自分を生きるハッピー姉
このワークシヨップはあと三回続きます。面白いことに出会ったら、また書きます。

● 伝えたいことその2

息子の通う工業高校の家庭科の授

業のこと。首の座らない生まれたての赤ちゃんの人形を抱いてみる。住空間を考えるために、間取りの載っている住宅物件のチラシを持っていく。アパートを借りる時のこと、敷金・礼金の話など、実際に生きるに当たって大切なことが次々と展開され、皆、興味深げに聞いているそうです。特に赤ちゃんの人形を抱いた時の腕の中の頼りなさは、とても印象的だったようで、こわごわと抱いた感触がいつまでも腕に残っていたようです（もちろん飯作り、服作りも）。

● 伝えたいことその3

佐野洋子さん（いうまでもないですが、絵本作家の方）の『ふつうがえらい』（マガジンハウス）という本を読んで、自分を愛せて、すてきだなーと感じた本です。図書館で、たまたま

棚からハミ出し気味だった本で、押し込めるのもなんだなあ、で借りたけど、借りてよかった。

大阪 松本 真理

いつも楽しく読んでます。「買売春の是非論を越えて」は私にはタイムリーな話題でした。

あるサークルで回覧ノートをやっていて、メンバーの一人が横浜だかの生協の冊子に載った瀬地山角氏の「より良い性の商品化論」を挟んできたことから、ノート内で買売春論争が巻き起こっていたからです。とっても実際誰も当事者はいない。ただ、私はメンバーの「売春ノー！援助交際はノー！ついでに愛なきセックスもノー！」というモラリスティックな反応に違和感を覚えました。

さて、話はこちらと変わりますが、私は十一月に神戸学院大学で行われた薦森樹さんと井上はねこさんが出

られた公開講座の壇上に上がったのがきっかけで、翌月にその講座を主宰された教授のゼミで「体験的ジェンダー論」を話してくれないかと誘われました。私にとってもこれは貴重な体験ではないかと思ひ、喜んでお受けしました。といっても素人もいいとこなのですが、教授が「体験から」とおっしゃられたので、学校時代から会社員時代、専業主婦になって子育てしてきた中で、率直に「ちょっとこのシステムが女性排除ではないか」と感じたものを話してきました。

学生たちの当日の反応は正直よくわからないものでした。しんと聞いてはくれているのですが、問いかけてもほとんど返事がなく指名してやると口を開くというもので、私の喋ることってつままないのかなと少し自信をなくしました。

が、後日届いたレポートはおおむ

ね好意を持って書かれていて嬉しかったのです。ただ中に気になるものがありました。「どうして（私が）そんなに働きたいのか理解できない。働きたかったら子どもなんて生まなければいい。僕が女性だったら働かずのんびりする」や「自分が傷つきたくないからジェンダーのせいになっている。ジェンダーを研究しているだけで社会参加してると思っている人がいるから、私は他人にジェンダーを研究してますなんていたくない」などの意見があり、見逃せないなと思いました。

誤解を生むような話し方をしたのは私の力量不足であることも認めますが、学生たちは約一年間ジェンダーを学んで来たわけで、それがこの発言を生むとはどういうことなのだろうかと考えました。彼らの勉強が足りないというのも当然あるでしょうが、使用したテキストに女性学の

'98年 山川彌栄賞受賞

介護とジェンダー
男が看とる 女が看とる

春日キスヨ著

88判/1997年/247頁/1800円

どうして女ばかり看取るのか?
フェミニズムの視点で、介護の世界を拓く
高齢化社会必須の本。

毎月1日発行 700円判 8ページ

購読料	1年間	4,320円
(送料込)	半年間	2,160円
	1部	360円

お申込みは **家族社**

〒730-0001 広島市中区白島北町16-25
TEL 082-211-0266
FAX 082-211-1761
E-mail kazokusha @ enjoy.ne.jp
郵便振替口座 01390-5-25205

Working With Women

性暴力被害者支援のための
ガイドブック

A5判並製・176頁・定価1,050円
フェミニストセラピー研究会編

〈救済する〉のではなく、
〈自己決定をサポートするための援助〉
とは?

米国ミネソタ州の性暴力被害者支援センターで行われている、「性暴力被害者支援ボランティア養成プログラム」を元に構成したガイドブックです。第I部ではプログラムの概要と資料を紹介しています。特に、支援者と被支援者との間に適切な境界を設定することの重要性が説明されています。現在援助に関わっておられる方ももちろん、これから援助職やボランティアをめざす方にも、ぜひ読んでいただきたい内容です。

○お問合せ・お申込みはフェミックスまで。
TEL/FAX 03-3424-3603

視点が欠けているのではないかと
思いました。話には『We』（98年12
月号）に掲載されていた『私たちの
就職手帖』の元編集長さんのお話な
ども引用させていただきましたが、
それに対しても理解ができませんでした。
男子学生も数名いました。

「当事者」ということで私を呼んで
くださった教授には感謝しています
が、一般のゼミならいざしらずジェ
ンダー論のゼミでこのような発言が
出ることがやはりジェンダー問題の

根深さ、女と男の意識の差、もひと
つえば世代の差を感じてしまいま
した。ただ、自分の学生時代を思い
起こすと、女性学には見向きもせず
バイトと男の子と遊ぶことに終始し
ていたんで、人のことは言えません。
学生たちが社会に出ていろんな問題
に直面した時に私の話を思い出して
くれたらそれでいいでしょうと思っ
ます。様々な意味で貴重な体験でも
ありました。

最後に、サークルの会員募集をさ

せてください。「楽しいだけじゃ物足
りない！」平成育児INGライフ研
究所（HILLS）（ヒルズ）は環境、
夫婦、ジェンダー、個性など様々な
問題をみんなで考えていく会報中心
のサークルです。会員は働く主婦、
専業主婦、独身女性、独身男性が全
国に200名。積極的に意見を述べ
てくださる方、大歓迎です。興味の
ある方は80円切手同封の上、大阪府
羽曳野市羽曳が丘1-6-10（〒58
3-0864）松本真理まで。

●オホーツクの潮風荒く——
江口凡太郎さん 昨年八月から育児休業をとり、三学期から現場復帰。四月からは紋別南高校に別れを告げ新任校へ。新たな日常からの報告を楽しみに……

●困ったときの一発ネタ——
育児休業中の江口さんが力を入れて連載してくれていました。が、6月号からは熊本家庭科サークルの桑畑美沙子さんのコーナーで「熊本発・困ったときの一発ネタ」が登場します。読者のみなさんの投稿もお待ちしております。

●家庭科 Click Here——山内隆子さん・加藤みな子さん コンピユータでマウス Click するように、家庭科のいろいろな情報を提供したいというお二人は教員の先輩後輩とか。

●食の歳時記——入江一恵さん 関西 We の会で絶大な信頼と共に愛され慕われる、ゴッドマザー的存在。そのパワフルさ、頼もしさゆえに、短大退職後も相変わらずの忙しさ。

●おんが歳をとるということ——木村栄さん ライター。著書に『三〇年目の同窓会』（筑摩書房）、「どこでどう老いるか（講談社）」など。「ビデオで女性学しませんか」（有斐閣）が近刊予定。現在、次作「女ともだち」を構想中。

●本をめぐる超！ 気まぐれなりれーえつせい——投稿でつくる連載です。読者のみなさんの投稿をお待ちしています。

●新・シネマの魔——武田秀夫さん 霞塾主宰。読んだあと映画の情景が浮かんできて溜息をつくほどの名文も、ますます波にのつてきた感のある武田さん。一緒に飲むと最高に楽しい。おじさんです。We に連載された「シネマの魔」も現代書館から近刊予定。

●乱読大魔王日記——冠野 文さん 「ブックマーク」というほんのミニコミを出している彼女のユニークな読書日記を We で楽しめることになりました。自称お便り魔。普段はメールのやりとりですが、先日事務所を訪ねてくれ、その飄々とした語

り口に改めてファンに。

●宮台真司の世紀末講座——「彼の本は難しいけど、はじめで分かりやすい言葉で書いたものを讀んだ」との感想もあれば、彼の論への詳細な分析と感想が寄せられたり、好き嫌いを超えて反響は大。鋭いなあと感じたり、やっぱり危ないなあとらはらしたり。今後は「自己決定」についてのインタビュを継続して掲載予定。

●性をめぐる超！ わがままりれーえつせい——特集やシンポジウムのテーマを〈性〉にすると、さまざまな反響が寄せられます。編集部でもしろうがつて作った新コーナー。読者の皆さんの投稿をお待ちしています。第一回の中抜きよしさんは名前が怪しげですが、電子メールでしか連絡の取れない謎の人物。先月号にシンポジウムの感想を掲載。

●ジェンダーフリー大曼陀羅図鑑——高森樹さん 新しい小説の執筆でしばらく缶詰状態だったそうですが、『愛の力』（仮題）

というタイトルで東京書籍から近刊予定。「巡業日記」からテーマを「ジェンダーフリー」に絞り、突っ込んだトークが続きます。

●自己表現トレーニング——河村ふみさん フェミックスで、カウンセリングや講座を担当。何を隠そう、自分が自己主張が苦手だから（？）ATの効果がよくわかり、人に奨めたくなるとのこと。読者からの反響が大きく、「それじゃあ」とはりきって、本にまとめるべく作業中。「わがままとは幸せになれる」というタイトルで近刊予定。お楽しみに。

●終幕——水田 赤子さん 城西国際大学学長。日米比較文学専攻。ポスト・フェミニズムの課題に迫るフェミニズム文学批評の第一人者。「居場所考」家族のゆくえん（フェミックス）「ことはが紡ぐ羽衣」女たちの旅の物語（思潮社）が昨年12月に刊行された。

*「ナヌムの家」から戻った坂本知壽子さんには次号から続投していただきます。（中村）

編集後記

●新しい春を迎え、少しリニューアルした今月号の『We』いかがでしたでしょうか。

居場所という言葉は使い古されたようで、それでもいつも心にひびく。自分の心の中の居場所と、自分とかわる人達でつくる居場所。どっちも大事。仕事の場である『We』やフェミックスが、プライベートと切り離すことなく大切な居場所となってるなんて、私はたいへん幸せ者。皆さんに感謝！河村さんのATも私の心のオアシス。々批判されても生きられる々なんてね、励まされちゃう。々べてるの家々のファックス通信「ばびぶべほ」。これもまた毎週月曜日の朝の私の（いや、フェミックス皆の）オアシス。いろんなこと、それこそ深刻なテーマもあつげらんかと笑い飛ばすそのユーモアの痛快なこと。ミニコミの最高峰ですよ。『We』もこれをめざしたいけれど、「ばびぶべほ」を読むとまたまた修行が足りないことを……。 (中村)

●「セックスするなら眠りたい―

ビビビコクラブの交換日記」(ビビビコクラブ編「居場所考―家族のゆくえん」(水田宗子)「Working With Women」性暴力被害者支援のためのガイドブック)(フェミニストセラピー研究会編)々、新しい本が次々と出ました。々かたち々になると、手応えがあつて、またうれいしいものです。新聞などの書評にも紹介され、少しずつ反響が寄せられています。

様々な相談やボランティア養成講座への要望も寄せられたので、性暴力やドメスティックバイオレンスの被害者支援ボランティアを目指す人のための短期養成クラス「性暴力被害者支援ボランティア養成クラス」を企画しました。99年6月1日(水)から開講。時間は10時30分〜12時30分(週1回・全20回)。定員12名。受講料六万五千元(資料代含む)。「Working With Women」を基本テキストに、当事者を尊重し、当事者の自己決定を支えるためのボランティアとしての役割、対応の仕方を学びます。要申し込み。

5月から連続講座「現在(いま)を生きる女性学」を開講します。

〈いまの私〉の問題意識から出発し、欧米のフェミニズムの試行錯誤に学ぶ中から、(たつた一つの正しいフェミニズム)を超えるものめざします。コディネーターは堀田碧さん。英語の講座もニューヨーク女性会議参加をめざして再出発します。5月8日(土)2時〜東京ウィメンズプラザでプレセミナー「フェミニズムの時代は終わったか?―ひとつのフェミニズムから多様なフェミニズムまで」を開催します。パネラーは竹信三恵子さん、北原みのりさん、朴和美さん、堀田碧さん。詳細はお問合せ下さい。(稲邑)

◆例年お振り込みが遅れる方が多いので、お断りがなければ5月号まで引き続きお送りしています。ぜひ99年度も継続ください。ようお願い致します。中止の方は手数ですが、ご一報ください。

◆「We」の宣伝用チラシ(バックナンバーリスト)と「読者カード」を挟み込みました。お知り合いの方に「We」をご紹介ください。見本誌お送りします。

◆5月号の特集は「一学校で生き延びる方法」です(編集室)

くらしと教育をつなぐWe 1999年4月号(71号/vol.8 No.1) 1999年4月1日発行

定価……680円(税込み)(年間購読料7500円/送料共)

発行……femix・フェミックス

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイランドハイツ703

tel & fax 03-3424-3603 E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp

富士銀行 池尻大橋支店 普1501277 郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス

編集……稲邑恭子・中村泰子

装幀・イラスト……川口民子

印刷……(有)イー・エム・ビー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

くらしと教育をつなぐWe 読者募集

フェミックス tel & fax **03・3424・3603**

購読ご希望の方は、編集部に直接お申し込み下さい。
電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で
〇号から購読希望と明記して年間購読料7500円を
お振り込み下さい。

- 定価 680円（税込み）
- 年間購読料 7500円（10冊／送料共）
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、さまざまなテーマを取り上げています。

1999年度の特集予定

●居場所考Ⅱ ●学校で生き延びる方法 ●高齢者福祉をめぐって ●働くことを考える ●ポルノグラフィ ●家族をめぐって ●ジェンダーに敏感な教育を ●フェミニズム2000

◎毎号の特集のほか、インタビュー「複眼で見る」やユニークな連載も盛りだくさん。

◎家庭科の特集ページ〈女と男の家庭科新時代〉にもご期待ください。

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーのリストをご希望の方はお問い合わせください。

■Weの置いてある書店■

- 北海道 ●旭川 こども富貴堂
東 京 ●表参道 クレヨンハウス
●東京ウイメンズプラザ内 パッチワーク
●新宿2丁目 模索舎
●荻窪 ナワ・プラサード
大 阪 ●ウイメンズブックストア松香堂
広 島 ●家族社

（書店でご注文の場合は「地方小出版社流通センター取扱い」としてお申し込み下さい。）

フェミックス

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイグランドハイツ703

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp